解題書目　第一八集

大津屋文書一

青森県立図書館

解題書目　第一八集

大津屋文書一

青森県立図書館

序

解題書目の第一八・一九集は、当館所蔵の特別資料から全一〇巻にわたる大津屋文書を取り上げ、本年と明年の二年にわたって刊行することにした。

大津屋は姓を今村といって、藩政中期頃より弘前藩御用達を勤めた家系である。初代先祖の九左衛門は丹波亀山（今の京都府）の出身で、八千石を以て豊臣家に仕えていたが、大坂落城後は家来一二人と共に北国に落ちて来た。途中ちりぢりになって一団は佐渡の金山へ渡り、最後まで北国を目指して弘前へ辿り着いたのは主従三人であった。今村氏は当地で商人となり、大津屋を名乗って造酒及び小間物業を永年にわたって経営した。

大津屋が頭角を現すのは、寛保三年（一七四三）弘前藩卯時方―弘前城内の馬屋に飼馬の飼料を毎朝卯の刻（午前六時～八時）に納入する役職―を勤めたことで、更に質店・金融・呉服・酒造業を営み、幾多の変遷・盛衰をみながら明治を迎えている。

今回、当史料を解読刊行することにより、弘前藩の側面や当時の生活様式を多少なりとも理解し、史料を研究される方々の手引となり得れば幸いである。

なお、史料の整理・解読・解説等については、これまでに引き続き福井雄三、葛西善一両氏の労を煩わしたことを深く感謝する。

平成元年一月

青森県立図書館長　古内明郎

目次

一、系図（仁）……13
二、親類書（儀）……26
三、累代記（禮）……33
一ノ巻……
書記（十代目今村九左衛門）……

凡例

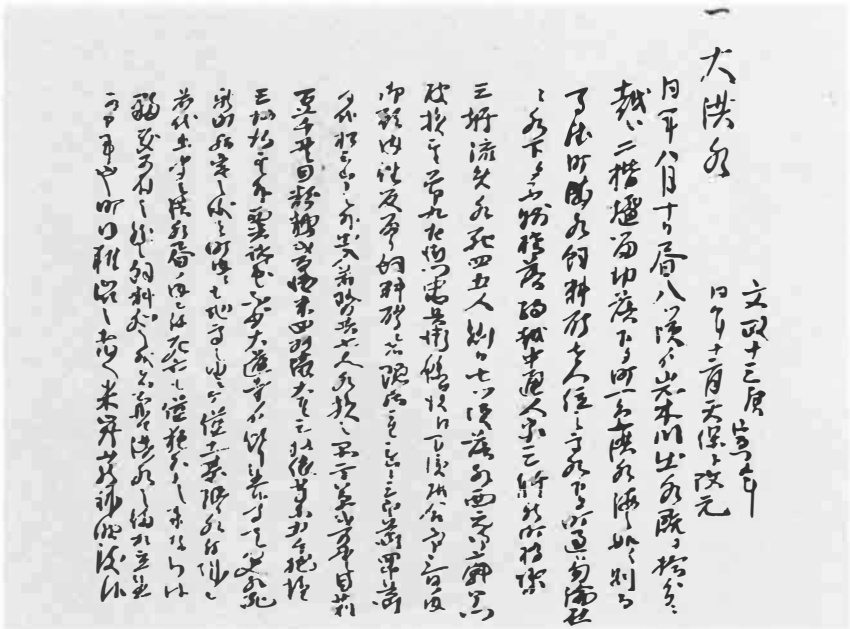
一、解題書目の第一八集は、大津屋文書一を刊行することにした。

一、大津屋文書十巻の内一巻～三巻　系図(仁)　親類書(儀)　累代記(禮)（一之巻）までの分とした。

一、紙数の関係上、文章の一部を割愛省略した。

一、通読の便宜上、句点・列点を施し、漢字仮名づかいは特殊なものを改変した。

一巻　系　図（仁）
二巻　親類書（儀）
三巻　累系代記（禮）一之巻
四巻　累代記（禮）二之巻
五巻　過去書（智）
六巻　血縁書（信）
七巻　家法書
八巻　家法書
九巻　追加家法書
十巻　二男三男心得書



文政十三庚寅年

一大洪水　　同年十二月天保ト改元

同年八月十日昼八ツ頃より岩木川出水既ニ拾分ニ越い二階堰留切落下夕町一円洪水海之如く別而馬屋町満水飼料所七尺位の高水下夕町通ハ勿論在々水下夕不残橋落駒越中通人家三軒新町橋際三軒流失水死四五人則日七ツ頃落水西之御廓御門破損其節九左衛門忠兵衛蜂ケ沢江下浜居合不申三日ノ内御郡内往友留り飼料所之者隠居源重三郎三郎兵衛四郎兵衛手代松三郎之外出入若勢共七人水損之品千草弐万貫目苅豆千貫目粉糠弐百俵米四拾俵大豆三拾俵藁五千把塩三拾俵其外漬諸色不少大道寺より預り置候馬壱疋水死新町居宅之儀普町内ニも地高ノ由ニ而僅土台限り水付誠ニ前代未聞の洪水猛之内ニ付死亡も僅夜分の事ならは夥敷可有之然者飼料処之儀者兼て洪水之備相立置可申や町内難渋之者へ米炭薪補助致候

大津屋文書 概要

津軽藩御用達、弘前大津屋の姓は今村である。

大津屋文書を順序よく列記すると左のようになる。

一巻　系　図（仁）
二巻　親類書（儀）
三巻　累代記（禮）　一之巻
四巻　累代記（禮）　二之巻
五巻　過去書（智）
六巻　血縁書（信）
七巻　家法書
八巻　家法書　追加（乾）
九巻　追加　家法書（坤）
十巻　二男三男心得書

この書をまとめたのは十代目の今村九左衛門（嘉永二年一八四九）である。

本文書の概要を示せば一巻の系図(仁)は元祖今村九左衛門宗重から書かれ、その人の出自から妻方の出自も書き

添えている。それに妻方の父及び妻まで載せて念入りである。主役となる主人公を中心に初代から十一代の幕末期まで家業と没年を表にすれば左のようになる。

今村家の家業と没年

代	名前	没年	家業	特徴
1	九左衛門	寛文五年（一六六五）	造酒	元祖
2	右仝	元禄四年（一六九一）	造酒・小間物	養子
3	右仝	享保七年（一七二二）	造酒・小間物・荒物	
4	十三郎	享保十年（一七二五）	造酒・小間物・荒物	
5	弥五郎	享保十二年（一七二七）	造酒・小間物・荒物	短命
6	九左衛門	宝暦十二年（一七六二）	卯時方・造酒荒物・小間物	養子
7	右仝	明和八年（一七七一）	卯時方・造酒荒物・小間物	
8	右仝	安永六年（一七七七）	卯時方倒産	
9	重三郎	弘化二年（一八四五）	卯時方・質店関所黒石へ追放	
10	九左衛門	嘉永二年（一八四九）	卯時方・金融質店呉服	中興の祖
11	右仝	不明	卯時方・金融質店呉服・醤油	

二巻は親類書(儀)で、弘前本町竹内半左衛門を筆頭に二十一家が書きこまれている。一例を述べると

弘前土手町高森三四郎五代目後室に高森三四郎より聟入是則六代目九左衛門也…と。

三・四巻(禮)は圧巻で今村家が弘前へ来たことと盛衰が盛りこまれ、それにその年々にあった作体や事件が書かれて社会時評の感がある。特に商人であるから物の値段の動きには敏感に記録されている。造り酒屋業であったせいか、米の値段は青森・弘前・鰺ヶ沢の相場変動が必ずかかれていて銭勘定が勉強させられる。

弘前藩の御用達であったから廃藩置県と共に運命共存であった。藩も又いかに商人達の懐に頼っていたか、その癒着ぶりもわかる。

元祖今村九左衛門は先祖は丹波亀山出身で豊臣家に仕え、知行八千石の大身、大坂落城後主従十二人が北国落ち、家来六人が佐渡金山に落着き、また同じ三人は秋田沢野辺に止まり、残った三人は弘前に来て商人となった。家来の一人は丹波屋を称し、もう一人は青森に下って京屋と言い、主人九左衛門は大津屋を名乗り造酒を経営している。

今村家で繁営したのは六代目九左衛門が寛保三年（一七四三）暮から卯時(うどき)方取扱いを命ぜられたので津軽藩と関係が深くなる。卯時方というのは弘前城内の二の郭や三の郭に馬屋に飼料を御役所に納入するので、卯時は毎朝卯の時刻（午前六―八時）に秣(まぐさ)を納入するから卯時秣の名がついた。その後表を見てもわかる通り盛衰もあり、御用商人達は明治維新になって大転換を迫られるのである。

五巻過去書(智)は十代を中興の祖として自分を讃えている。六巻の血縁書は妾服の子を取扱い更に縁類の部とし

てその一～二例をあげてみると

弘前本町陣屋藤兵衛・黒石近江屋四郎兵衛等

七巻家法書信は神仏信心の事から始まり敬神仏者でなければ家の経営が成りたたないとし、条文として最もなことを書き、八巻は更に追加をし常々考えたことをまとめている。

九巻は家の周辺や変事、例えば地震・火災があれば各自が守るべき部署を述べ、それに対応する道具まで微細に書いている。

家族全員は勿論、使用人等一切「いざ」という時の心懸けと役目を分担し、家は斯く守るべきもので災害を最小限に食いとめる手段書である。十巻は極くうすい冊であるが主人公を中心として二男三男はどうあるべきかを論じている。

系図仁

T280-0-1

系図

寛文五年乙巳九月廿四日

後樹誉雲清居士

元祖　今村九左衛門宗重

宗重生国丹波亀山之住人　大坂秀吉公江知行八千石にて御奉行申上　宗重十九歳之時秀頼公御代大坂没落ニ附上下捨弐人にて北国江下向　尤道中にて家来六人佐渡之金山に有附　亦三人秋田野辺沢に有附　残三人奥州津軽江落下　尤右家来壱人者青森京の惣右衛門先祖也　残壱人者弘前丹波屋仁右衛先祖也　右二人の者弐代寿閑代迄朔日十五日廿八日窺に参

寛文六丙午年六月朔日

後園誉妙鏡大姉

妻　おせん

おせん先祖近藤伊賀守禁中様附北面之武士也　右伊賀守嫡子摂津守二男弥五郎是則おせん実父なり

寛文廿一辛酉年三月八日

近藤弥五郎　　後浄誉林西居士

寛文四甲辰年十一月十七日

弥五郎妻　山城宇津五ヶ所鯉川好林娘　後全誉妙庵

女子おかね　　法名不知

右おかね服部長門守殿津軽浪人の砌同人江吳候所加州金沢江召連　知行六万石城主前田対馬殿妻に成る　男子壱人出生　宗重夫婦一生之内者加州より書状幷加郷絹折々音信来　此使竹内勘六先生栄心なり

万治二己亥年五月六日

男子　市郎兵衛　早生　後後誉授圓

女子　俗名不知　二代養子九左衛門連合に成

服部長門守藩祖為信創業の家臣中賀人者の達人

元禄四辛未年十二月十一日

二代　九左衛門　養子　後離誉寿閑居士

右寿閑実家百五拾石にて弘前町頭勤候　辻五郎兵衛之二男にて養子　右五郎兵衛嫡子無
調法有之御暇被仰付

明暦四戊戌年六月廿日

妻　宗重娘　後身誉妙心大姉

宗重嫡子市郎兵衛早世に附寿閑辻五郎兵衛方より聟入　男子壱人出生

男子　九左衛門三代目家督取　後　法要未に有

享保二丁酉年二月廿四日

後妻　妙心短命に附　後息誉妙休善尼

享保七壬子年四月十三日

三代　九左衛門　寿閑実子　後　往誉長念生西居士

享保十六辛亥年六月晦日

後　達誉通庵妙仙大姉

妻

男子　十三郎四代目家督取　後　法名未に有

宝永三丙戌年四月十九日

女子　大和屋伊左衛門江嫁　後　専察妙貞

宝永四丁亥年八月廿七日

女子　後　薫室妙香

正徳二壬辰年二月廿二日

男子　後　高山尋午法師

享保六辛丑年七月廿四日

女子　後　釈尼妙智

右女子東長町黄綿屋江嫁す　早世に附右女子衣類賣為菩提円明寺江撞鐘建立

享保十乙巳年九月晦日

四代　十三郎　生西実子

後　観山道喜居士

元文元丙辰年七月廿四日

妻　後薫誉妙香大姉

男子　弥五郎　五代目家督取　法名未に有

享保十二丁未年八月十四日

五代　弥五郎　道喜実子　後本誉浄還居士

妻　本町竹内半左衛門娘　浄還短命に付六代連合に成

宝暦十二壬午年八月五日

六代　九左衛門　養子　後諦誉宗善法山居士

五代弥五郎短命に付右弥五郎妻妙感江土手町高森三郎兵衛より養子

元文元丙辰年九月朔日

妻　浄還後室　後應誉妙感大姉

宝暦八戊子年三月廿四日

女子　おきく　黒石境市郎兵衛江嫁　後釈尼妙喜

宝暦七丁丑年六月七日

男子　壷三郎　早世　後　廓翁量然清観居士

後妻　おふく　妙感短命に付吉屋十五郎より来　後　善誉法鏡妙映大姉

女子　おゆり　七代目養子　三郎兵衛妻に成　後　法名未に有

女子　おその　本町宮崎源兵衛江嫁す　後　釈妙寿

女子　およし　七代目養子三郎兵衛後妻に成　後　法名未に有

男子　吉之助　八代目家督取　後　法名未に有

寛政四壬子年十二月朔日

男子　半蔵　竹内宇兵衛方江養子　後　乗誉一翁居士

文化九壬申年正月三日

男子　久司　出家に成油川浄満寺ニテ死去　後　息誉休心大徳

文化十五戊寅年四月二日

女子　おとよ　黒石境四郎左衛門江嫁す　後釈妙教

明和八年卯年六月廿二日

七代　三郎兵衛事九左衛門　養子　後　宝山栄寿居士

六代目嫡子吉之助幼少に付黒石境四郎衛門より養子

宝暦十二壬午年八月五日

妻　六代目娘ゆり短命に付子供なし　後　縁誉妙勝大姉

文政八乙酉年五月九日

後妻　六代目娘よし姉おゆり早世に付　後　宝誉妙樹栄林大姉

安永六丁酉年八月十八日

男子　永治郎早世　後　瑟玉和顔童子

天保十二辛丑年十月十八日

女子　おみわ　本町竹内半左衛門江嫁す　後　崇誉妙興和順大姉

男子　重三郎　九代目家督取　後　法名未に有

男子　太蔵　別家に成　後　大誉浄安賢栄居士　天保五甲午年十月四日

八代　吉之助事九左衛門　宗善実子　後　警誉瞻仰居士　安永六丁酉年十二月廿六日

妻　おらく　竹内半左衛門娘　後　生感教焉大姉　文化二乙丑年二月廿八日

女子　おたつ　三国屋勘左門江嫁す

女子　おれん　三国屋六三郎江嫁す　後　当誉妙起想念大姉　文化八年十二月十四日

九代　重三郎　栄寿実子宗保　後　縁誉光蒙普照居士

中興の祖

妻　おかつ　三国屋利右衛門娘　後　殊誉諦念妙勝清大姉

男子　万五郎　十代目家督取　中興の祖　九左衛門と改遁世後謙翁と号
法名未に有之

女子　おへん　竹内半左衛門悴恒五郎江嫁　後　連誉妙緑生光善大姉
ママ　二月廿八日卒

女子　おせき　藤崎村川越茂助悴茂作エ嫁す不縁に付戻り再堤町境屋太右衛門悴義蔵江嫁す　後　連誉妙生光善大姉

男子　完治郎後三郎兵衛と改和徳町大坂屋善義方江養子不縁に付戻り　後　膳誉仰念可宗居士
享和二壬戌年八月十六日

女子　おしな　早世　後　正全秋夢童女

男子　万治郎同人妻堤町三国屋勘左衛門娘おせき　天保九戌年十月分家に也
帛印大津と号す

男子　甚五良後永治良と改名同人妻五所川原三上長兵衛妹みつ不行儀に付弘化四丁未年正月内勘当

男子　竹五良　早世　文化三丙寅年正月十九日

男子　万三郎後重治良ト改　後　幼清善童子

女子　おいわ　早世　文化十三丙子年七月三日

後　釋相遊順童女　嘉永二乙酉年七月十四日

十代　九左衛門　中興開祖也九代目実子宗庸　後　広誉東呉由旬居士　天保三壬辰年三月廿八日

妻おみん　岩舘村斉藤勘助娘なり　後　摂誉妙取善八大姉

嫡男万五郎　早世　後　諦誉浄念賢勝居士

男子　万吉後仁三良と改又豊吉と改　同人妻三国屋勘左衛門娘短命に付里元江戻る

後　勝誉知友来蓮居士

男子　万作改和五良十一代目家督取　九左衛と改十一代家督取

嘉永二己酉年四月十代目遁世

弘前三丙戌年十一月廿四日

女子　よし　後いそと改桑野木田村松江宗助悴佐助エ嫁す　後　還到院安養妙園大姉

男子　未吉　早世　三十日の内に死去致候に付法名なし

女子　かね　竹内半左衛門悴半次郎江嫁す　後　実誉妙眞大姉

天保六乙未年九月五日

男子　吉三良　早世　後　覚誉往来観童子

後妻　おなる　弘前町年寄松井四郎兵衛娘

男子　豊太良　早世　後　実誉相好城蓮居士
天保十己亥年九月四日

女子　梅　天保十亥年正月十四日二子出生　早生　後　露散善童女

女子　おまん　出生右と同名改たか　同人江岩舘斉藤佐左衛門より養子入
嘉永五子年入家岩次郎

女子　おるか　天保十一子年二月九日生

男子　豊三良　天保十二丑年三月九日出生

女子　おみな　天保十三寅年二月十九日出生

男子　豊五良　天保十五甲辰年八月十日出生

十一代　九左衛門　十代目実子宗愛

妻　あさ　本町五丁目山城屋長右衛門娘なり

天保十五甲辰年九月廿八日

女子　みね　早生　後　現荘蓮夢童女

嘉永二己酉年七月十七日

女子　しゆん　早世　後　光顔幼夢童女

男子　徳三郎　嘉永三戌年八月十日出生

親類書儀

親類書

弘前本町

竹内　半左衛門

一、五代目弥五郎妻　竹内半左衛門より来る
一、八代目九左衛門妻らく　竹内半左衛門より来る
一、九代目重三郎姉らくわ　竹内与右衛門へ嫁
一、十代目九左衛門妹へん　半左衛門へ嫁
一、十代目娘かね　半左衛門悴半次郎へ嫁

弘前土手町

高森　三四郎

一、五代目弥五郎後室へ　高森三四郎より聟入　是則六代目九左衛門なり

黒石

境　四郎左衛門

一、六代目九左衛門娘きく　境四郎左衛門悴重郎兵衛へ嫁
一、六代目九左衛門娘よし　境市郎兵衛弟三郎兵衛聟入
是則七代目九左衛門なり
一、六代目九左衛門娘とよ　境四郎兵衛へ嫁
一、九代目重三郎客分てん当時四郎左衛門姉天保六未年来

鰺ケ沢

笠嶋　十郎兵衛

一、右十郎兵衛六代目九左衛門兄なり

弘前本町

宮崎　宇兵衛

一、六代目九左衛門娘その　宮崎源兵衛へ嫁

弘前本町

竹内　宇兵衛

一、六代目九左衛門二男半蔵　竹内宇兵衛方へ聟養子

弘前土手町

出ル町　与兵衛

一、六代目九左衛門悴十三郎へ出ル町与兵衛娘さわ来る
尤十三郎早世に付里方へ戻

弘前亀甲町

吉屋　重五郎

一、六代目九左衛門妻ふく　吉屋重五郎より後妻に入

弘前本町

三国屋　理右衛門

一、九代目重三郎妻かつ　三国屋理右衛門より来る

弘前土手町

三国屋　勘左衛門

一、八代目九左衛門娘たつ　九代目重三郎妹分にて三国屋勘左衛門へ嫁

一、十代目九左衛門弟万次郎妻せき同所より来る

一、十代目悴仁三郎妻たみ天保十亥六月廿三日同所より来る

一、十代目二男勇吉妻なを天保十五辰九月廿一日同所より来る

弘前本町

三国屋　六三郎

一、八代目九左衛門娘れん　竹内半左衛門へ引取　同所より三国屋六三郎へ嫁

弘前本町

大津屋　太蔵

一、右太蔵事九代目重三郎弟別家に成る　尤家計不如意に付元入金不遣

弘前本町

大津屋　万次郎

一、右万次郎事十代目九左衛門弟天保十亥年別家に成る　同十三年寅春改て元入金呉　本末の礼儀不失証札有り

岩館村

斉藤　甚助

一、十代目九左衛門妻みん文化十二乙亥年卯月斉藤甚助より来る

一、十一代妹たかへ養子岩次郎嘉永五子年斉藤佐右衛門より入家

九代佐右衛門は昔日の斉藤家にとりもどそうと努力した人

弘前土手町

境屋　太右衛門

一、十代目九左衛門妹きせ　境屋太右衛門悴善蔵方へ嫁

五所川原村

三上　長兵衛

一、十代目九左衛門弟三郎兵衛妻千代　右長兵衛より来る　子供なし

一、十代目九左衛門弟永次郎妻千代妹にて同所より来る

代々四郎兵衛で町年寄をつとめる

松井　四郎兵衛

一、十代目九左衛門後妻なる天保四巳年十一月三日同所より来る

桑ノ木田村
松江　惣助

一、十代目九左衛門娘いそ　惣助悴佐助へ嫁

弘前本町
山城屋　忠五郎

一、十代目九左衛門二男和五郎妻あさ　同所より来る
嫡子早世に付和五郎家督取る

弘前本町
武田　嘉七

一、十代目九左衛門弟三郎兵衛死去に付　同人妻千代　武田嘉七へ後妻に嫁

天保十三寅秋不縁にて戻る

本町壱丁目

金屋　兵衛門

一、三郎兵衛妻ちよ　天保十三年寅冬右同人へ後妻に嫁

以上

累代記　一之壱　禮

累代記

元祖　今村家

生国は丹波亀山で秀吉に仕える

今村九左衛門宗重　生国丹波亀山之住人　大坂秀吉公へ知行八千石にて御奉公仕　宗重十九歳の時　秀頼公御代大坂没落に付　上下拾弐人にて落下　道中において　家来六人佐渡の金山に有付　又三人は秋田野辺澤に有付　残三人にて津軽へ落来　弘前親方町に住す　是より宗重町人と成り家名を大津屋と号紋所大之字木瓜印　丸ニ帋の字

はじめ造酒家業

造酒家業

二代　九左衛門

二代目は聟養子

元祖宗重長男早世に付　右九左衛門　辻五郎兵衛方より養子

商売造酒並小間物家業

三代　九左衛門

右九左衛門二代目実子
商売造酒並荒物小間もの家業

四代　十三郎

右十三郎三代実子
造酒並荒もの小間もの家業

五代　弥五郎

右弥五郎四代目実子
造酒並荒物小間もの家業

短命

中興

六代　九左衛門

高森家より聟養子

五代目弥五郎短命に付　右九左衛門　土手町高森三四郎より養子

卯時方家業を仰付けられる

是より卯時方家業被仰付候に付　造酒方相止

一、卯時方発端

卯時方は寛保三年よりはじめる

正徳五年の頃迄　御馬飼料秣藁　薪　大豆の類　御郡内百姓より　日々朝卯の時に附上上納に相成候由　故に卯時方と唱　然所飼料品直納御免被仰付高壱石付　銭にて弐分七厘五毛つゝ百姓より上納に相成　是より町人扱に被仰付　右卯時方山本伝次取扱罷有候所　同人初め数多の兄弟共乱行放蕩にて　酒色博奕にふけり　終に家断絶と相成　御上様よりも莫大の引負いたし候に付　右伝次拝借分引請の上御町中に望の者へ入札御触出被仰付候に付　此方にて伝次拝借分五拾貫目余引請上納の上　右卯時方寛保三癸亥年十二月廿四日取扱被仰付候　右卯時方譲請の始末は寛保四年の御用留帳に精有　末代迄も此家業にて家名取続いたし候儀は　偏に六代目九左衛門御蔭なり

本町大火事で類焼

一、居宅類焼　　寛保四甲子年五月

家弐ヶ所土蔵壱ヶ所　飼葉小屋壱ヶ所焼失　土蔵三ヶ所相残る　右出火本町壱丁目菱屋何某の火元にて本町五丁目迄不残　鍛冶親方町不残　土手町の橋にて火留る　是則四年本町大火事と唱

一、三御馬屋年中九拾貫目に御任

宝暦三癸酉年十二月廿五日

釜蕩兵左衛門様御用番の節被仰付左に

卯時方一切の御入用　年中九拾貫目を以　来戌正月より　無勘定にて相勤候様被仰付候

一、為冥加銭三拾貫目差上

宝暦四甲戌年閏二月七日上納

乍恐以口上書奉申上候然者私へ卯時方御用拾壱ケ年以前子年より被仰付被下置
是迄の内以御威光無恙相勤難有仕合奉存候　殊に子年類焼に逢候得共　家作等も相應に
仕家名相続渡世安堵仕　御威光御国恩の程冥加至極難有仕合可奉申上様茂無御座候　随
て此度御趣意の御儀被仰出の趣段々奉承知候て　乍恐愚慮の私式迄難有奉感候御儀に奉
存候　依之願の趣左に奉申上候

一、兼て心懸申候は　近年の内　御入国可被仰出御儀と奉存候　右の節は何卒身分相應の
御用も相勤申度心願に奉存候　然者右御趣意の儀奉承知候上　御入部の時節迄差控奉伺
不奉申上候儀　兼て心懸申候心体にも相叶不申様に奉存候間　依之御上へ少分の儀恐至
極奉存候得共　為冥加の義は冥利の程も奉恐候に付　此度銭三拾貫目奉差上度奉存候
不苦被為召置御儀御座候ハバ　上納被仰付被下置度奉願候　乍恐御手伝にも相成申候御
儀に御座候ハバ冥加至極難在奉存候　尤御用向家業相勤申候上は　何分御用にも相立申度
心底に御座候間不顧恐右の段奉願上候　何分宜御沙汰被成下置度奉仰候以上

冥加金銭三拾貫目を差し出す

大津屋九左衛門

一、御町役御免被仰付　宝暦四甲戌年三月晦日
一、御用達加談五人扶持　宝暦四甲戌年七月朔日

町奉行所にて面目をほどこす

上方へ登るにつき、年の儀で駕籠料をいただく

一、御目見　　宝暦四甲戌年十二月廿四日

一、御町奉行所にて被仰渡左に

其方儀当夏より御世帯方御運送下加被仰付候処御用向無間断相勤候に付　此度御供方不揃御返弁に及　誠に抜群の給規模思召候　依之来年始出仕被仰付候

一、御継目御祝儀御能拝見　宝暦六丙子年五月廿四日於御詰座敷拝見

一、御上下頂戴　宝暦六丙子年六月四日

一、帯刀御免　宝暦六丙子年八月十九日

尤変の節も御免に被仰付

一、上方登於上方金子壱万両才覚出来

宝暦七丁丑年正月晦日

一、松井助左衛門殿へ麻上下にて罷出被仰渡左に

大津屋九左衛門儀御運送方加談御用向に付　此度上方へ差登せ候　依之雪中年寄の儀に候間　道中為駕籠料御金弐拾五両被下置候

一、菩提所西福寺へ永代祠堂米弐拾俵宛寄附

宝暦七丁丑年十二月

和徳村清三郎抱田地三拾人役永代拂料ニ上ゲ　尤年年立増米弐拾俵ツヽ西福寺へ納

手当金として年に三拾両いただく

九百五十両御用立

米千俵に銭を御用立

一、御馬壱疋飼料代四文目に被仰付

宝暦八戊寅年八月四日

右の外に諸色高直に相成候に付　為御手当御金三拾両ツヽ毎年被下置

一、金九百五拾両御用立

宝暦八戊寅年五月御印形之御証文有

一、銭三百三拾七貫百廿文御用立

宝暦八戊寅年七月御印形之御証文有

一、御料理頂戴　　宝暦十一辛巳年十月十二日

右者近年御運送方出精に相勤候に付

一、米千俵・銭拾五貫目御用立

宝暦十二壬午年閏四月十日上納

先去御用米弐千五百俵閏四月迄之内上納仕候様被仰付奉畏候　早速御請可奉申上候處

私身分大目の儀に御座候間　是迄御答奉遅成候　然共此度被仰付候御書付の趣　乍恐御

太切に奉存候間　工面才覚仕候て　米千俵・銭拾五貫目右両様閏四月迄の内段々上納仕
度奉存候　不苦被為召置候ハバ被仰付被下置度奉願候以上

大津屋九左衛門

一、土手町高森三四郎江銭七拾貫目余宝暦年中迄貸　其外委皆御世話いたし

一、大病御断書　　宝暦十二壬午年八月

乍恐以口上書奉申上候　私儀代々以御国恩家名相続仕　寛保四甲子年より卯時方御用向
取扱被仰下置以御威光家内相続仕冥加至極難有仕合奉存候　且又近年御手繰方御用向の
儀被仰付　為差御用筋も相勤不申　身分年始御目見被仰付其上御町諸役御免被成下置
御重恩の程難有仕合可奉申上様無御座候　然者私儀先頃より腫気相煩候所　段々養生も
仕候得共　老年の儀全快可仕体無御座候に付　乍恐存生の内段々の御礼奉申上候　且又
悴三郎兵衛此末共以御憐愍御用向被仰付　家名相続仕候様被下成置度奉願候　右の趣以
御序宜被仰上被成下置度奉仰候以上

大津屋九左衛門

一、御人参壱両頂戴

宝暦十二壬午年八月六日

腫気煩い全快は覚束ない様子、悴をよろしく

大津屋九左衛門儀病気大病に及候段被及御聞為病養人参壱両被下置候

七代　九左衛門　　初三郎兵衛と号

六代目実子吉之助幼年に付　右九左衛門黒石境市郎兵衛方より養子卯時方家業

一、御通懸御目見御手繰方手伝

宝暦十二壬午年十一月十日被仰付

千葉相良様御宅にて被仰渡左に

大津屋九左衛門儀御通懸御目見御手繰方手伝被仰付候

一、御年始御目見　　宝暦十三癸未年六月廿四日

佐野吉郎兵衛様御宅にて被仰渡左に

大津屋九左衛門儀　卯時方御用並御手繰方手伝相勤候に付　御年始御目見被仰付候

卯時方御用並に御手繰方手伝いで御目見

一、銀子弐枚頂戴　　宝暦十三癸未年十二月朔日

右者当時御難渋の所御当用御手繰方出情に相勤候に付

一、銀子弐枚頂戴　　明和二乙酉年八月二日

右者当年御繰合方御難渋の處別て出情に相勤候に付

明和の大地震

一、大地震　　明和三戊戌年正月廿八日

希代の大地震にて　御郡内人民夥数死亡怪我有　其外家潰夥数　別て黒石表夥強ク

境市郎兵衛方にて家内拾五六人死亡に及　其上居宅並土蔵拾壱ヶ所焼失いたし　右の大

変に付此方より　金弐百両手伝いたし　居宅取建遣　其外此方にて受合相成　上方表よ

り毛綿五百両代計づつ差下し商売いたさせ候

一、酒田本間氏預け金　　委しくは別帳に記し置

一、於本町造酒出店

明和四丁亥年九月より　本町四丁目戎屋定次郎家屋敷相求　同年より同七寅年迄四ヶ間

造酒出店の所　松前表張井宇兵衛方之酒参百両代程貸に相成候に付　右三百両受取に

石村八右衛門と申者差遣候處　同人差略にて八判拵張井より金子百両請取　同處より

大金を着服して八右衛門江戸へ出奔

江戸表え出奔　残弐百両の手形も八右衛門持参いたし　此方にて一銭も請取不申候　其後九代目重三郎　無家業困窮の節　残弐百両松前表張井宇兵衛方え直に請取に罷越候処宇兵衛方にても身上向不如意の由　重三郎空敷戻候

一、御料理頂戴　　明和六己丑年十一月廿三日

右は御手繰方出情に相勤候に付　於勘定所

一、御用達手伝　　明和七庚寅年十二月十一日

五人扶持被下置

一、米千弐百俵・銭九拾三貫四百四拾九匁御用立

明和八辛卯年御用立御印形の御証文有

一、大病御断書　　明和八辛卯年六月

乍恐以口上書奉申上候　私儀親九左衛門跡　宝暦十二壬午年十一月十日　御通懸御目見御手繰方手伝被仰付　同十三癸未年六月廿四日　御年始御目見被仰付　明和七庚寅年十二月十一日　御用達手伝被仰付五人扶持被下置段々結構に御取立被仰付冥加至極難有仕

合奉存候　以御威卯時方御用相勤　数代以御国恩家内相続仕御重恩の程に付可奉申上様無御座有仕合に奉存候　然処私儀当三月より痔疾相煩　大鰐え入湯仕候処不相応にて其後快気に相成以御威光段々養生仕候得共　逐日大病に相成　最早快気可仕体無御座候付　乍恐存生の内段々御礼奉申上候　且又悴吉之助儀　此末共以御憐愍御用向被仰付家名相続仕候様被成下置度奉願候　右の趣宜被仰上被下置度奉仰候以上

大津屋九左衛門

松　善左衛門様
松　助左衛門様

一、御人参壱両頂戴　　則日

大津屋九左衛門儀病気大病に及候段被及御聞為病養人参壱両被下置之候

八代　九左衛門　　初吉之助と号

右九左衛門　六代目実子にて　七代目に嫡子に成て卯時方家業

一、御年始御目見御手繰方手伝

明和八辛卯年八月廿日　於御町奉行處御申渡　左に

今村九左衛門悴吉之助儀　御年始御目見御手繰方相勤候様被仰付候　尤親九左衛門え被下置候扶持被差引候

畑作をし倒産す

一、御国産方被仰付

安永五丙申年　御国産惣司御用人樋口弥三郎様え御出入　上傘買請並蚕買受・絹糸仕込方　其外上野畑え草麻子・粒油等手作いたし　右の扱にて莫大の損失出来　其上不案内にて　米羽銭商いたし　是にても過分の損失に至り　是より身上向不手繰に成る

一、身上潰願　　安永五丙申年十一月晦日

御上様並諸銀主より惣借り方百八拾貫目余　卯時方有品四拾七貫目余　其外町在貸方弐拾四貫余り　差引百拾貫匁余り不足　右の分三拾年賦に被仰付度趣願差上候所　身代限分散被仰付　則被仰渡左に

佐藤理兵衛様於御宅　　両町目付

大津屋九左衛門儀　御用も相勤候處　身上相応の借りかた　諸銀主懸合に及　当座の通用手形差出　一統通用の差塞に相成候段諸銀主の内　身上潰に及候体のもの有之趣　必

竟心意不宜致方不届に付　其方家蔵財有懸封印有之候分　不残身代限分散被仰付急度慎被仰候

一、竹内半左衛門御呼上の上左に

此度大津屋九左衛門義不届の仕方に付　諸借金方身代限　諸銀主分散被仰付候　尚家業御用方も御取放被仰付候得共　数代相勤候儀に付　以御憐愍御馬方家業方は是迄の通取扱被仰付候

右の通被仰付候に付　百貫目位の諸道具代　以諸銀主分散いたし　訳立相返し　依て家屋敷土蔵自分物なり　翌酉の正月十七日慎御免被仰付候　右始末別帳え精相記

一、大病御断書　　安永六丁酉年十二月廿六日

乍恐以口上書奉申上候　私共明和八辛卯年八月廿日親九左衛門跡御目見被仰付　祖父九左衛門以来御馬方御用被仰付被下置以御威光家内相続仕冥加至極難有仕合奉存候　且又去年来身上不如意に付潰に及候所　不相替右家業方も被仰付被下置　御高恩之程重々難有仕合奉存候　然所私儀当二月より癪疾相煩候処能々養生仕候得ども　追て大病罷成最

早快気可仕体無御座候に付　乍恐存生の内段々の御礼奉申上候　随て弟三次郎儀若年の者に御座候得ば　親類共見継仕御用相勤候様仕度奉存候間　御馬屋方御用是迄の通被仰付被下置度　以御威光家名相続仕候様被成下置度奉願候　乍恐右の趣宜被仰上被成下置度奉仰候以上

大津屋九左衛門

九代　重三郎　　初三次郎と号

右重三郎七代目実子にて八代目九左衛門弟分になる卯時方家業

一、家督被仰付　　安永七戊戌年三月五日

今村九左衛門儀病死に付　同人弟重三郎え家名相続の儀　尚又御馬屋方御用取扱の儀共被仰付候

一、五所川原聟　　安永七戊戌年九月廿日

三次郎え家督被仰付候得共　未だ拾壱歳に相成卯時方御用向難相勤に付　諸親類より願の上　八代目九左衛門後室らく方え　五所川原村原庄兵衛弟庄三郎と申者　三次郎為見継聟入いたし願の上九左衛門と名改仕　同年より天明四辰年迄七ヶ年の間　三次郎見継卯時

聟庄三郎儀又々身上向き格別不如意

方御用向相勤罷有候所　右聟庄三郎儀諸事不行届に付　身上向格別不如意に相成候に付親類竹内半左衛門・高森市三郎・宮崎忠兵衛・笠嶋五兵衛・竹内宇兵衛より願の上　聟庄三郎五所川原え引取らせ候　是より三次郎拾八歳にて卯時方御用相勤候

天明の大飢饉到来

牛馬鶏犬まで食いつくす

一、大飢饉　　天明三癸卯年秋

天明丑寅諸国一統不作　別て寅年諸国共甚不熟にて　大坂え廻米は扨置　同所より米買下候由　如斯諸国共米拂底の所え　当卯の大凶作にて　七月廿日青森端々の者数千人相集り　同所分限の町家拾軒余家こわし有之　同廿七日昼八つ時頃新田百ケ村余飢饉の百姓共数千相集　御城下浜の町船場迄押寄騒動致し　其外弘前在浦々迄に毎夜五拾軒百軒と火事有之　誠に騒動前代未聞の事に候　米壱俵弐百匁・大豆壱俵百目　右の直段にても売買無之　飢饉の者共牛馬鶏犬迄も喰尽　後には親は子を喰　子は親を喰　人民餓死五万人程　他国いたすもの三万人程有之由　人は人を喰ふと言う事は前代も後代も有べき事か　常々凶作の心備可有之筈　可恐々々

一、銭拾壱貫八百七拾六匁御用立

天明三癸卯年中にて　御馬飼料代御渡方被仰付無御座盆詰文なし

一、御馬壱疋飼料代六匁に被仰付

天明四辰年正月　壱疋に付飼料代四文目御定の処　卯の大飢饉にて　大豆・酒粕・粉糠其外諸色莫大の高直に付　弐匁増直段被仰付六匁に成る

凶作で飼料代大高直

一、三次郎三都見物登　天明五乙巳年三月出立

一、御馬壱疋飼料代六匁五分に被仰付

天明八戊申年十一月　壱疋に付六匁の所　又々諸色莫大の高直に付　五分直段増伺の通被仰付六匁五分に成る

一、御蔵方無調法に付慎被仰付

寛政二庚戌年六月十七日

於松井助左衛門殿御宅

大津屋三次郎御馬方取扱の儀慎中に付　同人弟太蔵え取扱被仰付候　尤同人儀若年付竹内半兵衛後見被仰付候間　是迄の通夫々見聞の上諸事御差支無之様に可被申付候以上

一、家屋舗御取上御追放

寛政二庚戌年六月廿六日　翌寅年御追放御免になる

土岐渡人様御宅にて

其方共去秋御扶持方御蔵より御米内借いたし候段不届の至に候　依之急度被仰付方も有之候得共　以御憐愍家屋敷御取上げ　家財妻子に被下置三里追放被仰付候

翌亥年御追放御免になる

お米内借不届につき三里追放

家屋敷は竹内半蔵に御預け

一、卯時方三次郎弟太蔵え被仰付

寛政二庚戌年六月廿六日

大津屋三次郎儀御扶持方御蔵え懸不埒の儀有之　今暁三里追放家屋敷御取上ゲ被仰付候間　御馬方取扱先に被仰付の通　同人弟太蔵取扱竹内半蔵後見候様　尤家屋敷の儀は当分半蔵え御預け被仰付候間　是迄の通り諸事御差支無之様　此分可被申付候以上

松井助左衛門

竹内半蔵殿

一、銭四拾弐貫三百六拾匁御用立

寛政二庚戌年正月より七月中　御馬飼料代残り分にて御用立御証文有之

一、御手飼料被仰付

寛政二庚戌年七月より

於松山善左衛門御宅

御馬飼料方の儀　竹内半蔵・大津屋太蔵え先日取扱申付候得共　此度古来の通受拂役取扱申付候間　大津屋三次郎丈弁御蔵御用屋敷共諸拂〇え引渡候様申付候　尚又三次郎持合の飼料品御買上げ申付候間　是又受拂役へ引渡候様申付候　尤代銭の儀は　追て御積を以三次郎妻子え可被下置候　此合申付候以上

家内離散黒石え引越

一、家内離散黒石え引越　寛政二庚戌年八月

家内並番頭兵右衛門　長町纔成る所え住居致せ　重三郎壱人黒石え参　境四郎左衛門見せ借り　親方町離散の節売拂候諸道具並着類代　其外少々有合金を以　壱両年小質家業取扱候得共　追年喰潰に相成候に付局所引拂　黒石上町沢屋孫兵衛懸屋敷借用致し　弘前長町より母並妻子取寄　二三年の間有銭並地借繰合を以　木綿小間物太蔵に商売致せ母抔は手自薬鍋拵候て　銘々口過同様に相働漸々に日用相凌

一、御郡内焚炭運上一手取扱被仰付

寛政八丙辰年八月

黒石上町にて纔成る木綿小間物商売致候得ども　元来不得手故過分喰込相立相続方殆ど為遍道具衣類等迄不残売喰同様の為体にて黒石住居も相成兼　誠に千辛万苦致　夫より重三郎壱人弘前え罷越　何哉家業の道色々工夫を巡候得共　御上にては御仕向呉最中にて新家業堅く御差留にて何も埒明不申　家運も最早是限と　日夜朝暮相煩候所　風と炭の運上え心付候に付　直様竹内半左衛門方へ罷越　相談の上同人合師に致し　右焚炭買請取扱の儀書付差上候所願の通被仰付候　是より母並妻子不残黒石引拂　弘前長町え取寄扱又焚炭御城下惣入用高拾万俵宛在々より買請に付色々変化有之　或はとつと附上り又は大雪にて人馬の往来留り附上げ不足の節抔は　日々炭買の四百人許づつ相詰色々口叩致候に付　御町奉行所え願の上　御町同心並御町目付拝借仕　店先え座らせ置乱妨を相防取扱候得共　是又手薄故諸銀主利足失却に相成渡世方も六ケ敷　寛政十午年迄三ケ年右運上相勤取扱方願の通首尾克御免被仰付候　是より無家業に相成道具衣類等迄売喰いたし　寒中も夜着一つ着候に成て体散々にて困窮言葉にも難尽候

焚炭拾万俵を在より買請

無家業で売食い生活

一、再卯時方被仰付

寛政十一己未年六月十一日

寛政二戊亥此二ヶ年御馬飼料にて　同扱人佐藤清太夫様・乳井弥三左衛門様　色々御倹約相立候得共御有余不相見得　夫より飼料品並諸懸半減同様に御減之上　漸々壱疋に付三文目に相当り候由に御座候得共　飼葉小屋修覆　其外御役人・小人色々の諸失却にて御益筋不相立　其上色々御扱増にて御行届兼　是より三御馬屋並御召馬屋共　御手飼の名目にて　亀田屋長之助に被仰付　其後壱疋弐匁外にて長之助え取扱　寛政十一未五月迄八ヶ年の間被仰付候　然所同人扱中年毎に飼葉御差支に及　御郡所え相願　在々浦々え御割付奉願　殊の外御取扱に相成候　御代官様御立腹に被成　不届の趣御申立被成候由　其上弐匁五分にて引合兼候由　壱疋壱匁弐分五厘の増直段等相願甚敷御取扱に相成候故　右無調法に付御呵の上　寛政十一巳未六月御取放　万五郎え被仰付候　則於御町奉行所被仰渡左に

大津屋重三郎子万五郎儀　御手飼料方取扱被仰付候　尤道具の儀　亀田屋長之助より受取候様　尚又同人親類宮崎忠兵衛・小繋屋弥太郎見継致　受人に相立候儀共申出の通被仰付候

六月十一日

重三郎御役人中へ御礼参り

右の通被仰付候に付　御役人中様え重三郎御礼廻り致　尤此節太蔵上方表へ罷有候　尚又重三郎儀は　先年御扶持方御蔵え対　無調法有之候に付　重三郎実子万五郎え卯時方被仰付度旨御内意申上願の通被仰付候

一、長町引拂御馬屋町飼料所え引越

寛政十一庚申年

同年より翌酉の年迄　家内飼料所に住居の処　御場所柄に付女共計引取被仰付夫より荒町小路え引越

一、荒町小路借宅

享和二壬戌年

右家主小商人兵庫屋喜兵衛より借宅　尤惣坪数拾八坪の所　御馬屋小人紋蔵と三四年の間合借屋致し候所　いかにも馬使に付　大屋喜兵衛え頼合の上　右御馬屋小人引取らせ丸屋にて文化十一甲戌年迄拾三ケ年の間借宅致　身を責質素倹約相守

一、太蔵上方下り

寛政十一己未年秋

内々不如意に付太蔵儀三年以前巳の年上方え奉公に罷登候所　大坂何某の気に入奉公致落

付罷在候所　此方にても　再卯時方家業被仰付候に付　右の趣申遣候所　早速罷下り願を演　翌申の年より竹内半左衛門方え同居致し　銘々口過同様金売仲間に出候て　初二三年の間独身にて相働　其後伊香久左衛門妹妻に貰　前後八九年の間金売商買いたし誠に質素倹約　千辛万苦いたし候處　甲斐あり成立に相成　文化六巳年より本町壱町目武田跡三郎懸屋敷借り箒同十三子ノ年迄八ヶ年間造酒家業いたし　夫より本町壱丁目住吉屋兵三郎家屋敷買求　木綿小間物商売致抜群の規模相立

伊香久左衛門妹を妻に

造酒屋業

一、目屋野沢流木一年取扱被仰付

文化二乙丑年三月廿五日

七ヶ年以前卯時方取扱再被仰付候得共　兎角内々不手繰にて　相続方六ヶ敷　何を相応の儲に相成候扱向色々工夫を巡　佐山弥太郎之相談に及候所　目屋野沢流木の論出候に付　夫より同人と相談相決　弥大郎合師に成り　流木一年取扱の儀願の通被仰付　尤御元入為御前銭を御買上木三百五拾巻代九拾四貫五百匁御頂け被仰付候に付　右を以仕入方存念通出来取扱候所　生憎と則年六月大洪水にて流木三百五拾巻流失相成　大目の損にて既に両家共身上潰に及可申程の事に相成　夫より以御威光川下夕所々家さがし致少々埋合相立候得共不少損失に相成　然所翌年寅年流木無難にて土場宿に相成大に利潤を以　丑年

洪水にて流木流失大目の損

損失埋合相立両家共一切損徳無之誠に虎口を遁れ候　是より重三郎思ひ直し　兎角山商売其外新法事にては　迚も利運無之　長久も難計　然ば無懈怠常々質素節倹肝要と相心得　是より重三郎表向は隠居と相唱　御用方を悉皆悴万五郎に扱せ　家内の御世話いたし　手自釜の火迄も焚　質素倹約の外無他事相守

一、頼母子加入発端

文化四丁卯年春より同八未年迄　流木方取扱相止　卯時方一業相守　飼料等買入方え種々心を入　渡世方も色々倹約相立候得共　以前と違御仕向壱手飼料の跡に付　兎角渡世方六ケ敷所より　遠代の扱向工夫相巡候得共　其頃は手薄誠に借宅に付諸才覚致　多少共不出来　殆ど心労の所　其頃世上日頼母子流行　茂森町源十郎と申者相頼め連中を拾人位づつにて　一日四文目集　一ヶ月間弐拾匁懸銭の所　三拾匁より四拾匁位計づつ返済り銭有之　終迄不縁取替者三歩余の利足に相廻り　是え数十口加入致候得ば　決て銭儲可致と急度心得候得共手薄にて其儀も不埒明　然拾五貫目より弐拾貫目迄の大無尽専流行致候に付　是え四・五口加入いたし　眞物家論取候處　八朱の利足に当り　右を以日頼母子概て八九十口加入いたし　年々惣勘定致差引五・六貫目位の利徳に相成　其上格別成立の様に世上評判に相成　自然と印形通用相弁　自由に諸才覚出来是成立の根元

と知るべし　併発端より未年迄五ヶ年加入の處段々不取締に相成色々御叩にも相成候に付　申年より賴母子の根を切候者未利運致候儀は一端の時運に有之候間　子々孫々猥に加入致間敷者也

一、飼葉小屋九ヶ所新規取建

寛政十二申年より文化元子の年迄　卯時方並被仰付候得共　飼葉小屋百五拾坪ならで御館無御座右手挟の處より　長之助扱中諸色御差支に及候付　重三郎直々差図の上　苫葦にて三百坪程飼葉小屋出来　飼料品備相立御差支無取扱罷在候所　御場所柄苫葦の小屋御目障りに相成候に付　不残取毀柾屋根に相建候様被仰付候得共　三百坪程の坪数に付大工年々懸候ては不少物入に付　重三郎思慮にて堀立縄からがきにて出来いたす尤壁原を柱隠候に付土蔵作りに相見得候

現三百坪の飼葉小屋出

十代　九左衛門　　初万五郎と号

右九左衛門九代目重三郎実子也　文化四丁卯年より重三郎表向隠居致候に付　卯時方御用九左衛門相勤

一、御能拝見　　文化六己巳年八月八日

右者殿様被叙四品候御祝に付　尤於御城鯨の間拝見　御平木の赤飯頂戴

一、為冥加御省略中御馬壱疋に付壱分直段下り

文化九壬申年三月

乍恐以口上奉申上候　然者私先祖寛文元年大坂表より御国元え罷下り　造酒家業仕　其後寛保三年より御馬方御用取扱被仰付被下置　是迄数代以威光家業相續仕　御国恩の程可奉申上様無御座冥加至極難有仕合奉存候　随て乍恐左に奉申上候

一、此度御格段の御省略被仰出候様に乍恐奉承知　随て恐至極に奉存候得共　家内養育方の儀此上格別質素省略も仕　為冥加御馬壱疋分飼料代御定直段弐匁六分より御省略中壱分引下　弐匁五分にて御用方是迄の通無御差支取扱仕度奉存候　少分の儀奉申上候儀も恐多奉存候得共　宜御沙汰被成下置度奉仰候以上

大津屋万五郎

飼料代壱分引き下げ

一、年頭御目見被仰付　　文化九壬申年五月十五日

於成田求馬様御宅　松井四郎兵衛殿御出席　大津屋万五郎儀　御用方飼料御時分相弁取扱心を入奇特の者に付　年頭御目見被仰付候

一、為冥加米百俵差上　　文化十癸酉年十二月

右被仰付之始末左に

於御町奉行所田中太郎五郎様・小山内右衛様御出席の上　弘前町中分限相應の者共　数多御呼上げ被御渡左に

当年作体不熟に付　耕作夫喰為御貸付其方共え御用立半被仰付　尤差出方来早春迄調達致候様に被仰付候

右の通弘前諸町人にて壱万五千俵余被仰付　其外両浜在々浦々にて四万俵被仰付候由

此方えは弐百俵被仰付候付　右御答左に

乍恐以口上書奉申上候　在方夫喰米御用に付　来春迄弐百俵上納仕候様被仰付恐入奉畏候　随て願の趣左に奉申上候

弘前町人に米壱万五千俵被仰付

一、昨年より御馬飼料方に付　御国恩為冥賀御省略中毎年弐貫目計宛御有余奉差上　家内養育方の儀格別質素省略仕　今に居宅等は求兼借宅仕御用方無差支取扱罷有候　然ば当年不熟作にて御収納米格別御減石の由奉承知　私共迄奉恐入候　猶又数代御国恩の私

何卒弐百俵都合仕奉上納一度奉存候得共　手薄の私繰合行届不申　依之少分の儀恐至極に奉存候得共　為冥加の米百俵奉差上度奉存候　乍恐右願の趣宜御沙汰被成下置度奉仰候

以上

大津屋万五郎

郡内不作

一、御郡内不熟作　　文化十癸酉年

同年時候不順にて冷気勝秋米壱俵三拾弐匁位

一、御料理頂戴　　文化十一甲戌年五月三日

於御町奉行所被仰渡左に

其方共の御用立米申付候処　御時合勘弁為冥賀差上米致候　奇特の者共に付依之御料理頂戴被仰付候

右の通被仰渡　為流三の丸於御座敷御料理薄茶御菓子等迄頂戴　尤御饗応役御米方小頭衆御給仕御坊主　尚又此方旧家の由にて数十年の上座被仰付候

希代の台風

一、御郡内不熟作　　文化十一甲戌年秋

同年七月十二日希代の大風にて　田畑共みのり不熟秋米壱俵三拾壱匁　翌年夏迄壱俵四

拾六匁迄いたし

一、荒町小路借宅引拂同町忠蔵屋敷え引越

文化十一甲戌年十一月三日

右忠蔵屋敷　本町壱目金屋兵衛門持屋敷にて　同人より年賦にて相調　尤？年親方町旧宅没落已来廿五ヶ年間　辛苦艱難致し　質素倹約の規模相立　漸々手廣の所え引移

文化十二乙亥年秋

洪水多い年

一、御郡内不熟作

同年七月中旬洪水にて田畑に水害あり　是により時候冷氣勝にて不熟　尤秋米壱俵に付三拾匁位　尚又諸国夥敷洪水の由

この年豊作

一、御郡内豊作　　文化十三丙子年秋

同年夏暑気相続順気能　秋米壱俵に付弐拾匁五分位翌年秋迄弐拾四五匁致し

一、御郡内豊作　　文化十四丁丑年秋

同年順気能秋米弐拾匁五分位　翌正月より夏迄弐拾四五匁致

一、御郡内大豊作　　文政元戊寅年

同年五月より八月迄暑気相続　秋米壱俵に付拾八匁五分　翌春拾九匁余位

一、九代目重三郎母寿像一軸出来　　文政元戊寅年

右母者当家再興のいさをし讃辞にしるし永く尊崇怠るべからず

一、白狐寺鎭守堂再建　　文政二己卯年五月

先祖より鎭守稲荷堂大破に付新規再建法式別帳に有

一、弐歩金初まり　　文政二己卯年

近年小判痛金多相成候に付　以来右弐歩金通用致候様御公儀より御触書御下しに相成候

一、御郡内大豊作　　文政二己卯年

同年四月閏月有　暑気相積実り克出来　壱俵拾五匁五分より下も米拾四文目位迄　大豆拾五六文目　鯵ヶ沢御印付米弐拾四文目　上方表御国米石に付銀三拾七匁　江戸両に付壱石四五斗より壱石八九斗迄　翌夏御国相場壱俵に付拾三匁位

同年諸国一統豊作に付三拾年以来無覚米価を下げ候に付　諸色の儀も右に順一割通直段

引下げ売買の儀　御公儀より諸国一統え御触出被仰付

一、御賞御金千疋頂戴　文政二己卯年十二月廿五日
　於田中太郎五郎様御宅被仰渡松井四郎兵衛殿御出席
大津屋九左衛門儀御馬飼料方取扱拾数年来出情に相勤猶又三御馬屋え度々御出の節　御
供廻休息方扱方心を入　奇特の者に付為御賞金千疋御目録の通被下置候

一、菩提寺墓所柵立新規取建
　文政三庚辰年四月

十カ年以前より町々家質引当貸をする

一、在貸発端　文政三庚辰年
本業卯時方計にては成立早敢取不申候に付　十ケ年以前より有合並他借を以　町々家質引当貸七拾貫目余弐歩の利足にて　町役末印の上貸付来候得共　年中の利廻り壱歩半位ならで無之　其上年数に相成候得ば　小者勝に付末には無利足にて年賦等にいたし候得ば勘定に引合不申候付そろそろ相止候て九代目重三郎砕肝膽種々工夫を巡候て在貸え心付　三ケ年以前寅年より当辰年迄左の通相試

一、永覚方

此訳粉糠酒粕諸方在方え貸付通帳差出

一、寿覚方

此訳正銭弐歩の利足付にて貸付　其外毎年十二月に入大豆翌年の相場をにらみ無利足にて貸付

一、吉覚方

此訳百田村三平と申者年来出入致　至極正直の者に付　同人手先を以在馬百疋計づつ難渋の方より頼合に寄買取　拂方の儀は三ケ年賦にて貸付

貸付高百貫仕込めば拾貫余の利

右三覚悟の拾三ケ年試候處　在方至極助情に相成　尚又此方にても想応の利益に相成候に付年々貸付高有合並他借を以　百貫目位仕込候得ば　拾貫余の利潤に至る　此の覚帳面の名目不思議なるかな　重三郎夢中にて思出文字のごとし　目出たくおこなはれ一方の扱となる　右働き方の始末別帳三冊に巨細あり

一、御郡内豊作　　文政三庚辰年

同年暑気おくれ　上田の部壱人役に付三四斗減石致す　然共諸国一統旧穀沢山に持越候

に付　新出米年内中相庭　上米壱俵に付拾六匁　下々米拾四匁五分位　大豆は近年の上作に付壱俵拾壱匁位　翌春に成元来減石の所より　上方表引上りに付　上米にて拾八九匁位　鰺ヶ沢御印付弐拾七匁余　大豆浜届拾七匁三分位

屋形様侍従となる

一、屋形様御昇進　　文政三庚辰年十二月十八日

去月十八日於江戸表屋形様松前表無怠慢被遊御勤誠に御年輩に被為至候に付　侍従被為蒙仰候旨来候　此旨可被申触候以上

四月　　田中太郎五郎

一、冥加金三拾両差上　　文政四辛巳年正月廿日

乍恐以口上書奉申上候　然者私先祖寛文元年大坂表より御国元え罷下造酒家業仕　其後寛保三年より御馬方御用取扱被仰付　是迄数代以御威光家名相続仕　御国恩の程可奉申上様無御座冥加至極難有仕合奉存候　随て乍恐願の趣左奉申上候

一、旧冬於江戸御恐悦の御儀奉承知候　乍恐私式迄奉恐悦候　依之少分の儀恐至極に奉存候得共　為冥加金子三拾両奉差上度奉存候　不苦被為思召候ハバ上納被仰付被下置度奉願候　右の趣宜御沙汰被成下置度奉仰候以上

正月廿日　　大津屋九左衛門

松　彦太夫様

松　四郎兵衛様

一、御能拝見御酒御吸物頂戴

文政四年巳年五月廿六日

右者屋形様御昇進に付冥加金三拾両差上候處　於御城御能拝見の上御酒御吸物頂戴

屋形様昇進に冥加金三十両

一、御能拝見　　文政四辛巳年五月廿八日

右者御昇進御祝に付於御城御能拝見の上御祝頂戴

一、菩提寺位碑堂新規取立　文政四辛巳年七月十三日

一、御郡内豊作　　文政四辛巳年

同年秋米拾六匁内外　鰺ケ沢御印付御拂米壱俵弐拾七匁　大豆作の儀は諸■共甚不熟にて過分減石相立候由　其上虫付多大豆不宜　然共上方に古持越大豆過分有之よしにて直

段下落壱俵受元拾壱匁五分位

一、御賞御目録金弐百疋頂戴

文政四辛巳年十二月廿八日

於御勘定所成田求馬様被仰渡小頭衆御出席　大津屋九左衛門儀　御召馬並三馬屋飼料取扱方数年心を入　猶又江戸御登せ馬・大豆買入方格別実体の旨相達候間為御賞御目録被下候

一、御郡内豊作　　文政五壬午年

同年植付頃より旱魃既六十日雨ふらず　四拾年以来の旱魃の由　別て下在日々人馬呑水迄不自由致候由　依て御郡内不勘減石致候　則年秋売出米拾九文目より拾八文目迄　大豆拾四文目位　壱番相場御拂米弘前弐拾七匁三分九り　鰺ヶ沢弐拾八文目弐分　青森三拾匁壱分五り　翌春追々引立　三四月鰺ヶ沢御印付三拾弐匁位

人馬呑水まで不自由の大旱魃

一、御郡内豊作　　文政六癸未年

同年五月中旬より既五十日余雨ふらず　新田在より深沢通六月十四日大雨降候處多少よ

ろしく　御近在不少早損則年秋売出米拾九匁より弐拾匁迄　大豆不作にて初拾七匁　後弐拾弐匁迄　壱番相場御拂米弘前弐拾四匁三分八厘　青森三拾弐匁七分八厘　鰺ヶ沢弐拾九匁六分八厘八毛　冬買御拂下米鰺ヶ沢御印付則納弐拾八文目

豊作三年目

一、御郡内豊作　　文政七甲申年

同年夏中旱魃七月廿五日大雨作体え障り　御郡内平均壱人役壱俵位減石相成　秋売出来弐拾五匁より弐拾三匁迄　大豆拾六文目　壱番相場御拂米青森三拾四匁　鰺ヶ沢三拾壱匁八分八厘　弘前弐拾九匁七分八厘八毛　右買御拂則納三拾壱文目

江戸表御殿普請と御婚礼で物入多し

一、御用金　　文政七甲申年二月

右被仰渡始末左に

於町奉行處太郎五郎様・成田求馬様御出座の上　弘前町中分限相応の者御呼上御演説の旨左の通

松前御用被為蒙仰候以来　御物入多の上　恐悦事被為続　殊に去る酉年不熟作より御勝手向御行詰の御場合に被為至　夫々当年江戸表御殿向御長屋御普請より　来酉年御婚礼御物入不少　御繰合御差支に付　既御家中知行御給分の内　弐分通乍恐も差上度儀願出

の所御満足被思召御聴届被仰出難有事に候　乍去御物入多の御場合御行届難被為成に付深御厭被思召候得共不得止事　此度在町浦々迄御用金の沙汰も御聴届被仰付候に付御尊慮の所如何程御厭可被思召候や　御苦労の程奉恐察候　一同重畳奉恐入候事に候依之重々も厚く差含之御尊慮は奉安候様心懸　此節の御場合得と申含一統能々致勘弁御厚恩の程難有奉存御用金差上候様申付候以上

御用金差上げの演説

口　達

近年御物入続にて御差支の御場合に付　在町浦々へ御用金被仰付候儀　先頃御家老衆御演説にて被仰付　猶又御用人中より御演説書御渡被成候に付　則相渡候間拝見致候様　尤御時合勘弁致　何れも為御国恩え御用向相勤候様　尤難渋申唱等致候者有之候ては恐入候事に候間　左様無之様　尚又他国え響合候ても不宜候間

御用金の儀は難渋申さぬよう

右の處も能々勘弁致候様申付候以上

二　月

右の通弘前並在浦々にて金高壱万四千両被仰付　尤此方金七拾両被仰付候

不作にて米・大豆高騰す

九代藩主御隠居十代ご入部

一、御郡内不作　　文政八乙酉年

同年夏中不気候にて　六月中出穂見得ず　其上虫付作にて不少減石　秋売出米三拾匁より三拾壱匁五分迄　大豆拾八匁　壱番相場御払米弘前四拾弐匁六分八厘九毛　青森四拾九匁七分八厘九毛　鰺ヶ沢四拾三匁八分九厘二毛冬買則納四拾壱文目

則年不気候にて七月に入不時米価引立　両浜津出御差留　弘前御蔵米並下タ米賣人無之端々騒立候に付　其節此方にて御印付御蔵米三千俵余持合分　弘前へ繰替　町中へ相場より安く売払候處　町中騒相止奇特の旨御賞末に有

一、同年　侍従様御隠居　御家督　御入部

一、御能見物　　同年七月六日

今度御昇進　御隠居　御家督　御入部御祝に付

右御祝頂戴　御能見物被仰付候間　来六日明け六時登城被仰付候此旨申入候以上

六月廿七日　　松山善八郎

大津屋九左衛門殿

一、五節句御目見　　文政八年八月二十一日

於町奉行處御申渡左に

大津屋九左衛門　先頃不順季にて町々小売米等差支候節　一巳の利潤に不拘下直に拂米致処より融通相開　人気も穏に相成奇特の者に付　五節句御目見被仰付候　此旨可被申渡候以上

八月二十一日　　藤田藤介

町奉行中

値をさげて払米をする

一、御賞五百疋　　同年十二月廿八日

此方病気に付　悴万五郎名代に差出候處　於町奉行所に被仰渡左に

大津屋九左衛門儀　御勝手方御繰合御用差働出情相勤に付為御賞目録の通被下置候此旨可被申渡候已上

十二月二十八日　　堀五郎右衛門

対馬俊蔵殿

一、幸来方始末

不熟作三カ年つづく

借財がかさみ、心を入れかえ働く

文政元寅年より在貸相始　三覚方と申唱　御近在者飼料処にて直に扱　新田在者廣田村長作と申者出入致せ　右屋敷の内え馬屋並居間取建　夏中手代壱人毎年十月より翌年二・三月中加勢詰合の上　専貸付方相働候処　折悪敷酉の年より打続三ケ年の間不熟にて既に貸高四百貫目程受取方不治定に相見得　殆ど相勢の相続方相逼り　夫より急度思案致　其頃まで隠居重三郎の家務扱罷在候得共　前書在貸四百貫目空当に相成　其上弐百貫目余借財有之　老年の親に苦痛懸候儀孝道にも相反候に付　改て家務引受　猶又年来御勝手方の出入いたし候と乍申　心を用得　種々機密相はからひ　御払米並御買入米引受取扱　其外上方御登せ米　大豆御取組扱仕候処　自然手寄を以　泉州堺酢屋利兵衛え取組被仰付彼是相働手繰にも相成候処より　御勝手口御当用御差支の節は　千両・弐千両・三千両或は五百両・七百両と度々差繰の上御用立申候

一、御郡内不作　　文政九丙戌年

同年夏中至極順気能相納候処　案外虫付にて減石　秋出米弐拾壱万より弐拾三万迄　大豆拾六文目　壱番相場御拂米青森四拾壱文目六分七厘八毛　鰺ケ沢三拾四万七分八厘六毛　弘前三拾三万七分八厘九毛　冬買御払米三拾壱文目

一、御目見以下御貸渡味噌取扱

文政九丙戌年五月

右被仰付左に

御目見以下諸支配並諸組え年々御貸渡被仰付候　味噌是迄梅屋八左衛門取扱罷在候所同人儀難渋にて仕込相成がたく　誠に故障の筋有之候に付　右取扱難申付旨被仰付候間以来其方え右取扱被仰付候　此節より仕込高秋御貸渡の節　差支無之様被仰付候此旨申入候已上

五月二十四日　　勘定小頭

大津屋九左衛門殿

一、御郡内不作　　文政十丁亥年

同年夏中順気も相応に有之候処　七月に入度々雨天続　七月廿五日所々洪水に付　水堪場所不少其上一統米生合不宜　格別減石　然共他邦尽熟上方米価引立不申　秋売出米弐拾目　大豆拾五文目五分　一番相場弘前三拾三匁三分八厘九毛　青森四拾匁八分八厘　鰺ヶ沢三拾四匁弐分八厘七毛　冬買御拂米弐拾八文目より三拾目　翌年四月両浜津出御差留

不作であるが米価は、引立たず

一、町内補助　　文政十丁亥年五月

同年四月江戸表にて　公儀え無調法の儀御座候由にて　御逼塞被仰付　五月三日早打着
則日より七十日御遠慮中　町々諸職人至困窮の様子に付　町内小者え米壱俵え炭焚木
小出銭添補助致候處　外町内重立にても近々差出候由

一、御繰合方に付御取立被仰付　　文化十年十一月七日

右被仰付始末左に

御用の儀有之候間　明七日四つ時以前　笠原次郎兵衛殿御宅え相詰候様被仰付候
右の通被仰付候間此旨申入候以上

十一月六日　　松井健左衛門

今村九左衛門殿

尚々五つ時名主会所迄相詰居筈　右次第御宅え相詰候様

一、病気差合等無之様被仰付候間　右の心得にて相詰候様

一、紋付服麻上下にて相詰候様　刀用意致尤風呂敷え成共包目立不申様いたし持せ候
様此旨共申入候以上

御箚紙拝見仕候　私儀御用の儀御座候に付　明七日四時以前　笠原八郎兵衛様御宅へ罷出候様被仰付候趣奉畏候　右御請為可申上如此に御座候恐惶謹言

十一月六日　　今村九左衛門

松　健左衛門様

御請

翌七日笠原八郎兵衛様へ罷出候處被仰渡　左に

御自分儀俵子五拾俵被下置勘定小頭格御手繰方取扱被仰付候

御出席役人左に

御家老　津軽監物様

同　笠原八郎兵衛様

御用人　西館宇膳様

同　藤田荘介様

同　藤田権三郎様

大目付　勘定奉行

一、同八日御役人御礼廻り左に

私儀今般勘定小頭格被仰付俵子五拾俵被下置御繰合方取扱被仰付難有仕合に奉存候
右御礼為可申上之伺出使候

同　日　　今村九左衛門

一、御談え御用有之候間明九日四つ時　笠原八郎兵衛殿御宅え御談候様此旨申入候以上

十一月八日　　釜萢源左衛門

今村九左衛門殿

尚々上下着用罷出候様此旨共申入候以上

則　日

則日相詰候処前書御役人中御出座の上御口達拝見被仰付候左に

口　達

此度其方共一門結構御取立被仰付候儀者　委細御家中より口達被致候通　寛政の度松前御用向より積年種々の御物入其方共存知の通に候　御大礼の度に御用金被仰付候処　御領民御厭の所より　御才覚を以無理成御手繰にて御間に合候得共　此節御繰合必至と御差支被為至候に付　分限に応じ御用金も可被仰付御場合に候得共　此度格段の御趣意被

差立　其方共御繰合御用被仰付一同難有奉存　年来御国恩の冥加を深く勘弁致し　身分相応御用向相勤　銘々若又御国恩忘却筋なき難渋申唱候者有候者無御用捨御糺明可被仰付候　呉々も一同熟知いたし御用向大切に出情可相勤候　猶委細勘定奉行より可申達候

以上

身分相応に御用金は勘定奉行より申達の由

十一月

一、寛政の度松前御用向被為蒙仰候以来　莫大の御物入の上恐悦事相重　旦御隠居　御家督　御婚礼金　難差延御大礼のみ　其度に無理成御手繰計りにて　御用向は夫々無御滞被為済候得共　積年種々御物入打続　此節御勝手御繰合礒と御差支被為至　依之段々御評議も相尽候得共　一体の御相続の處　他所御才覚被仰付候ても利益御国中え相孕むにも無之　弥御不益に付　此度御趣法被差立　其方共一同え御勝手向御繰合御用被仰付候　御用相弁候程の利益は一同相潤候事に付　御国恩の冥加を相弁ひ何れ共御用向情入可相勤　委細は御用人より可申達候以上

寛政以来の物入莫大につき御用立は後に御用人より

十一月　　御家老

一、申談の儀有之候間　明日九つ時御勝手方え相詰候様此旨申入候以上

十一月九日　　釜泡源左衛門

尚上下着用の上罷出候様此旨申入候以上

則罷出候所御用達並御繰合方一統え　弐万金調達被仰付候に付　在町弐拾九人の面々相談の上割合左に

一、弐千両　前田常次郎
一、弐千両　片谷清次郎
一、千三百両　伊香才吉
一、千両　武田正二郎
一、八百両　中村久蔵
一、八百両　玉田善兵衛
一、三百三拾両　今村九左衛門
一、六百拾両　稲見伊佐衛門
一、三百三拾両　玉田嘉三郎
一、五百三拾両　加藤八九郎
一、五百八拾両　今井善七

御用金割合表
今村九左衛門は三百三十両

一、三百両	原平左衛門
一、七百六拾両	斉藤幸次郎
一、五百六拾両	阿部弥八郎
一、七百拾両	三上重郎兵衛
一、八百三拾両	七戸藤助
一、六百三拾両	村林平左衛門
一、八百三拾両	戸沼治左衛門
一、五百五拾両	金屋兵右衛門
一、三百六拾両	武田甚左衛門
一、九百両	松山忠左衛門
一、弐百八拾両	高田庄太郎
一、弐百八拾両	高谷十介
一、四百拾両	月永長兵衛
一、九百六拾両	鳴海栄作
一、四百両	宮川栄吉
一、弐百六拾両	増田幸介

一、六百両　前田忠五郎
一、三百両　岩見忠兵衛
一、四百両　前田清蔵
一、三百拾両　木下儀八郎
一、四百両　片谷繁吉
一、六百両　松木彦次郎
一、三百両　菊地常蔵
一、四百両　長内覚兵衛

都合三拾五人　此金高弐万弐千六百拾両

右の通御受差出候處　十一月十二月両月にて　三ヶ度の上納被仰付候

覚

一、私儀此度倅子被下置結構御取立被仰付難有仕合奉存候　随て為冥加右御礼奉申上度候間右の段宜御沙汰奉仰候以上

十一月　今村九左衛門

一、其方儀倅子被下置候　御礼被仰付候間　来朔日五ツ時登城被仰付候此旨申入候已上

十一月二十八日

釜蒭源左衛門

今村九左衛門殿

今村家に対する所遇

覚

一、貴様儀此度御繰合御用金取扱被仰付候に付　左の通被仰付候

一、式日並其外登城の節　詰所御備方二階相詰候様

一、御用に付在方両浜より弘前へ罷上候節　往反宿継人馬受取方　並に途中にて一宿等有是有節　御賄置手形致候様

一、年頭登城の儀は　二日登城の儀被仰付候

一、末期の節　判元見届被仰付候

一、諸取引え立入候儀ハ勿論　家業方に付在町是迄の通振合を以差働候儀被仰付候

一、出座有之節　詰所の儀評定所御門前へ相詰候様

一、勘定小頭格被仰置面々　年頭の外　式日並其外登城の節　御用有之候得ば罷出不申様尚亦出座の節は詰方に及不申旨被仰付候

右の通被仰候間此段申進候以上

十二月七日　　勘定小頭

今村九左衛門様

一、御能見物御場演御酒被下置

文政十年十二月二十七日

右被仰渡左に

其方共御繰合御用向出精相勤候に付　御慰の御能見物御場演御酒被下置候

十二月二十八日

郡内豊作九州変事

一、御郡内豊作　　文政十一戊子年

同年奉立より至極季候克　近来無覚相納り　然共昨年減石に付孕米不足　其上中国不作の由にて　七月下旬雨続急に引立　下夕米御印付三拾三匁　御蔵御印附三拾八匁迄致候

同年秋差出米並御拂訳相場九州変事に付色々変侍付末にあり

一、江戸御上屋敷御焼失　文政十一戊子年二月二十日

一、調達金　　文政十一戊子年二月

但旧冬上納の割合にて三百三拾両上納　尚又仲間三十五人に付弐万千六百拾両上納

一、新田方御用達被仰付　同年二月二十五日

御用の儀有之候間　明二十五日五ツ時拙宅え相詰候様此旨申入候已上

三月廿四日　　松井四郎兵衛

大津屋九左衛門殿

右被仰渡左に

大津屋九左衛門儀新田方御用達被仰付候間　開発方郡奉行・新田奉行承合を（以脱藩）相勤候様此旨可被申付候以上

三月二十五日　　藤田権三郎

対馬俊蔵殿

新田開発奉行脱藩につき承合相勤

一、御紋形御上下頂戴　文政十一戊子年五月十五日

御用の儀有之候間　明十五日四ツ時已前登城被仰付候　此旨申入候以上

五月十四日　　釜滝源左衛門

今村九左衛門殿

於御時計の間御用人大道寺字左衛門様御申渡左に

一、其方儀近来御繰合方出情　其上御取極米取扱方御出銀等差働候に付為御賞御紋形御上下被下置候

御出御大目付　岩崎藤左衛門殿

勘定奉行釜蒭源左衛門殿

五月十五日

御取極米取扱方に出情

一、御能拝見御酒御吸物御上下頂戴

文政十一戊子年七月二十八日

御用の儀有之候間明二十八日六ツ時以前登城被仰付候此旨申入候已上

七月廿七日　奈良荘司

今村九左衛門殿

於御時計の間御用人藤田庄介殿御申渡左に

年来御用向出情に相勤　其上昨年より今年過分の大金調達上納相立御都合に相成候旨
達尊聴御満悦に思召　依之御紋形御上下被下置候

二の被仰渡左に

昨今年調達御用向出情に相勤候に付　御賞方被仰付候得共　大金上納相立夫々御都合に
相成候段　逸々達上聞御満足被思召　依之只今御慰の御能見物被仰付御酒御吸物被下置
格段の思召を以　右の通被仰付候間難有存　快頂戴寛々見物致候様御演説被仰付候

則日

大金上納に付きお能拝見と酒吸物いただく

一、御郡中御用金

文政十一戊子年八月被仰出　御繰合方三拾五人の外左に

弘前　四千両　左方　七千両
青森　弐千両　鰺ヶ沢　千両
五浦　百七拾両

〆壱万四千百七拾両被仰付候

一、九州変事　　文政十一戊子年八月

九州変事で死者甚大

米・大豆騰貴

江戸表の上屋敷普請で物入れ莫大

同年五月以来九州・長州・長崎数度の大雨洪水にて國々不残破損　別て八月九日　古今未聚有の大風雨　高汐にて　筑前・豊前・豊後・肥前・肥後右五ヶ国夥敷相損じ、死人潰家破船言語ニ難述　作体平均三歩と相聞え　其外中国辺不熟の旨追々相達　十月上旬頃より旅人冬買入込　弘前売米廿四匁の所　追々引立三拾匁迄　御印付御蔵米三拾七匁御拂の処　是又引立四拾五文目迄　津出御印拾弐匁迄　翌春ニ至米御印拾五匁　大豆同拾弐匁　鯵ヶ沢健米す売買ハ九月頃弐拾弐・三匁の處弐拾九匁迄　大豆同弐拾匁より弐拾三匁五分迄　壱番相場御拂米青森三拾九匁七分八厘　弘前鯵ヶ沢御見合せ一統米方参配せ持下なり

一、調達金望成上納　　同年十二月

於御勝手御用人衆勘定奉行御出席御演舌左に

去冬より当春迄御繰合方調達金の儀　此節御返済被仰付候　然ば定て其方共も存の通当時御勝手向御差詰　御国江戸表共必至と御差支ニ被為置　殊ニ御上屋敷御普請莫大の御物入　暫時御猶豫も難相成且年内日合は無之儀　其上莫大の御不足にて迚も御返済の御沙汰に至兼候付　一旦御返済には被仰付候得共　其儘御借返被仰付候　一同難渋の段ハ深く御厭被為思召候得共　前時の次第不被為止事儀に付　何れも御国恩冥加を勘弁致　聊心得違無之様右相心得候て委細勘定奉行可申聞候

十二月廿弐日

一、御郡内豊作　　文政十二己丑年

昨年九州変事・中国不作の由にて冬買珍敷入込　二月三月に入追々騒立御印付米六拾目迄下夕米三十六匁迄　津出御印弐拾五匁迄引立候に付　他所冬買幷御料中手附差買米取引不残手附倍通ニ相成候

同年春立不気時　稲作生立不宜所　残暑に至暑気聊作体立直り候得共　薄立作にて減石

秋米は為弐拾四匁より弐拾五匁迄　御印付御拂米三拾七匁　青森差継四拾三匁余　鰺ケ沢三拾六匁外弘前三拾六匁七分余

一、御能拝見　　文政十二己丑年六月五日

其方儀御勝手方御繰合出情相勤候に付　御能拝見御酒御吸物御湯漬被下置候間　来る十五日六つ時登城候様被仰付候　此旨申入候以上

六月十二日　　工藤仁十郎

今村九左衛門様

一、尾形様御逢蒙御意　　同年六月十五日

御能拝見中於鷺の間御役人衆御出席の上御意左に

其方共儀近年凌合方出情相勤候間　今日能見物致候様

一、笠原八郎兵衛殿於御宅御役人衆出席御口達

同年六月十七日

去々戌年御趣法被差立　其方共一同御取立の上御繰合御用被仰付　御用相弁候程の利益は　一同相潤候に付　御国恩の冥加を相弁精入相勤候様申付候　猶出銀致候分は　堅野八郎兵衛引請御返可被仰付候段申渡　同年冬八郎兵衛御用向に付　江戸立帰登被仰付罷登候所　其方共存の通去春江戸御屋鋪御焼失　右御取建御入用計も既三万両余其外種々御物入不少處　一体の御相続六ツカ敷御場合へ右の次第に付　既御郡内一同へ御用金も可被仰の処　去々暮何れも出情相勤候事に候得ば深被遊御厭　江戸・大坂にて差向御才覚にて可成御間に合に候程の事に候　乍併去々年御繰合出銀無間違引請御返済相立可申の段申渡候上は　如何様共御差繰一端御返被仰付度色々評儀被懸候得共　委敷其方共も存の通当時中々手段に及兼何共残念の至に候　然るを以て其儘差置候ては愈違約に相当心痛の事候　依之御時合柄否止義厚ク勘弁　去々年御繰合御用調達の義は　御勝手御取

堅野八郎兵衛

江戸御屋敷焼失

直立暫御返し御沙汰及兼候　委細は御用人より可申達候

六月　　御家老

則日於御用所御用人中並勘定奉行中より御申渡候得共同御用に付略す

一、調達金冥加願七百三拾四両余　同年七月二日

乍恐以書付申上候　私儀去々亥年御取立被仰付　其上度々御賞等被下置冥加至極難有仕合奉存候　然ば去春江戸御屋形御焼失　右御取建其外種々御物入被為有　私共迄奉恐入候　随て奉願御儀恐多申上様奉存候得共　調達金元利七百三拾四両余為冥加奉差上度奉存候間　御聞届被仰付下候ば難有仕合奉存候　乍恐右の趣宜御沙汰奉仰候以上

七月　　今村九左衛門

奈良蔵司様

其方儀御国恩為冥加是迄の調達金元利共差上度旨申出の趣奇特の至有之候間　御聞届被仰付候此旨申入候已上

八月十日　　古川忠左衛門

今村九左衛門殿

一、御繰合方増減

一昨年被仰付候三拾五人の内　武田正三郎・玉田喜三郎・増田幸介・原平左衛門・高田庄太郎右五人内々不如意にて御免被仰付候　右代り役左に

一、七百両竹浪七郎兵衛　　一、七百両平山半左衛門
一、七百両西谷護次郎　　一、七百両夏原藤兵衛
一、五百両北山長次郎　　一、四百両葛西幸七
一、五百両大屋万次郎　　一、四百両田沢三郎司
一、四百両奈良岡丹十郎

内々不如意で御免の者面々

一、御法事　　同年十一月

来正月十四日高源院様弐百回御忌　十一月八日より十四日迄於長勝寺　一七日御法事御取越被仰付候　御香典青銅三十銅拝礼被仰付候

十一月廿五日瑞巌院様百回御忌　廿三日より廿五日迄於長勝寺　二夜三日御法会　於報恩寺御茶湯拝礼被仰付候

瑞巌院は三十六才で亡くなった信興

一、御郡内豊作　　文政十三庚寅年

同年十二月天保と改元

同年春立順気能　作体相応に納り　壱番船差の頃御印付三拾八匁位・大豆弐拾弐匁相場の處　追々越後通不作の旨　御寄合米御印拾五匁　其冬御拂米四拾三匁の処　又々引立五拾壱匁迄　下夕米三拾壱・弐匁　壱番相場御払米青森五拾壱匁三分・鰺ヶ沢四拾五匁弐分余　弘前四拾五匁壱分六厘迄

一、両浜米大豆御印一手取扱

同年両浜米大豆津出御印御用達の内片谷清次郎・玉田善兵衛・此方三人組合一手扱被仰付　三家にて七千両余先納の上　御印米・大豆にて拾万俵余取扱いたし候

一、大洪水

同年八月十日昼八ツ頃より　岩木川出水　既に拾分に越え　二楷堰留切落下夕町一円洪水海の如く　別て馬屋町満水　飼料所七尺位の高水　下夕町通は勿論在々水下夕不残橋落　駒越中通人家三軒　新町橋際三軒流失　水死四五人　則日七つ頃落水　西の御郭御門破損　其節九左衛門・忠兵衛鰺ヶ沢え下浜居合不申　三日の内御郡内往反留り　飼料

岩木川大出水で水下は残らず橋おちる

所の者隠居道重三郎、三郎兵衛・四郎兵衛手代松三郎の外　出入若勢共七人　水損の品干草弐万貫目　苅豆千貫目　粉糠弐百俵　米四拾俵　大豆三拾俵　藁五千把　塩三拾俵

昼の出水で被害を食い止む

其外粟諸色不少　大道寺より預り置候　馬壱疋水死　新町居宅の儀は町内にも地高の由にて　僅土台限り水付　誠に前代未聞の洪水　昼の内に付死亡も僅　夜分の事ならば夥敷可有之　然ば飼料処の儀は　兼て洪水の備相立置可申事也　町内難渋の者江米炭薪補助致候

一、御料理並御酒御吸物頂戴

同年十二月廿八日於御時計の間　御用人野呂典司殿被仰渡左に

今村九左衛門儀御勝手方御用御支の場合勘弁致　当座調達金出精相勤候に付　御料理並御酒御吸物被下置候

右

豊作続きで物価は安定

一、御郡内豊作　　天保二辛卯年

同年作本相應ニ相納り　然共前年越後不作にて松前米価引立　春立より御印米五拾八匁弘前三拾六匁迄　米御印弐拾匁　其後六・七月相緩ミ　冬買御拂米三拾六匁　米御印

拾匁　壱番相場御拂青森四拾四匁七分六厘　鰺ヶ沢四拾壱匁七分八厘　弘前四拾壱匁六分八厘

一、大材買調戸〆被仰付

同年新町居宅並土蔵四ヶ処新規取建　取質並味噌家業心掛け　前年より大材木在方より買調　居宅門前え積置　其外両隣家並屋敷譲受専手配の所　右木品御極印の旨にて　同年二月十五日足軽目付見聞　三拾壱本四拾坪に相成　九月三日より十月三日迄三十日戸〆被仰付恐入候　委細御取扱向答御用留ニ有　元来在方屋敷内殊雑木に付　御制禁に無之儀に不穿鑿にて買入御咎を受候　然ば却て大小に不拘無極印並隠責の品下直成共買入可申ものにあらず　子孫迄可心懸事に候

一、本町居宅買求始末

前文の通　新町にて居宅取建可申心懸の処　大材一條に付　則年普請見合候處え　前田兵蔵支配人卯兵衛と申者用向有之参候て　四方山の咄合の由　同人の力にて手続過ぎ手入旁不行届の旨咄合に付　九左衛門風と心付　譲受の儀申懸候所　速ニ相談に相成高森三四郎仲立にて　家屋鋪建　屋敷諸土蔵五ヶ所にて金七百両ニ譲受　則年十月廿四

木材関係で三十日の戸〆

家屋敷建て土蔵五カ所求む

日忠兵衛・万次郎引移り手入いたし　十一月六日新屋敷家内引移る　天晴名地にて子孫繁栄と年来の大望成就

尤隣家紙屋惣右衛門家屋敷も五拾金に譲受　此処両屋隠居家住屋にいたし候

一、御賞金七百疋頂戴

同年十二月廿二日於御勘定所勘定奉行笹森百郎殿事申渡左に

其方儀御勝手方御用出情相勤候に付　為御賞御目録の通被下置候

一、御郡内違作　　天保三壬辰年

同年春立より不順季　夏土用中雨続　残暑に至候得共薄暑にて自然時節相後れ　盆後より出穂に成候に付実法り不宜其上減石　八月廿四日岩木山え雪相見得　同年米価相場壱番船着頃　御印付米四拾匁位より三拾八・九匁　下夕米弐拾八・九匁　前年上方豊作に付引下ゲ　下り船甚不足故に　米御印拾文目処　八匁に成　然共荒積苅立後れ　九月に入弥々引立　下ゲ米三拾六・七匁　津出無之故　松前大上げ　御印米青森六拾匁迄　新穀に成三拾五匁　御印付冬買御拂五拾七匁　壱番相場青森七拾弐匁壱分八厘　鰺ヶ沢六拾弐匁弐分八厘　弘前六拾弐匁六分弐厘御印弐拾五匁

八月廿四日岩木山に雪ふる

一、居下御役御免

同年二月十五日於町奉行処御申渡左に

大津屋九左衛門新田方御用達被仰付候処　格別心を入出情相勤候旨相達候間　御用達勤中町御役御免被仰付候

一、米蔵取建並普請

同年居宅不残住居替並米蔵取賦　三間に七間に立直し引移　手入より当年にて五百金の物入

一、御賞金七百疋頂戴

同年十二月廿一日於御勘定所古川忠左衛門殿被御申渡左に

今村九左衛門儀当春より両浜津出御印扱方に付　過分出銀出情に取扱候に付　為御賞御目録の通被下置候

一、畦掛壱反被下置

同年十二月廿九日於御勘定所古川忠左衛門殿御申渡左に

去暮より過分調達金致　殊に此節の御繰合向相弁ひ調達金の内　千両居置候趣共申出
格別奇特の至に候間　為御賞目録の通被下置候

お国大凶作、秋田も同様

一、御郡内凶作　　天保四癸巳年

同年青森御印付米五拾五匁　弘前御蔵米三拾八匁　津出御印拾八匁　大豆御印拾三匁
下夕米三拾五匁の処　薄暑にて不気候　田畑甚敷不熟　六・七月に至　弘前青米四拾目
大豆三拾匁　九月に入弥々引立六拾五匁より九拾匁迄に相成　頻に天明卯年同様の凶作に相見得　人気甚敷動揺之処より　笠原近江殿御用人被仰付　御国政惣棟梁被蒙仰
江戸御国共是迄の御家老より御用人中其外御奉行及諸役方迄　蟄居或は死罪等被仰付
別て秋田様大凶作にて御国御同様　御役人中御呵被仰付候由　国民死亡夥敷　窮民数千人御国表え入　為御救の新馬町百道院において　御役人御差立　翌年迄御養被仰付候

一、御用金千両　　同巳年三月十七日

口達

御勝手向近年種々御物入積にて御借財増しに相成御窮迫の処え　昨年不熟作にて御収蔵格別相減　其上上野御用等被為蒙仰必至と御行詰被為至　公儀御勤務も兼被為届程にて

町在の者共御用金可被仰付御場合ニハ有之候得共　御国表の儀は　御国民御養御根元の儀に付深被為御厭　御手元格段御省略被差立両都御廻米等欠石　種々御差略被致候得共　御国表此節より九月迄の処　御手配殊被為行届候間　其方共引請　別紙割合の通り此節より当九月中迄　月々無欠目上納致候様　御返金の儀　当冬御利足付の無相違御返可被仰付候　前条にて申演候通り　御国表は御根元の書付　御国民殊の外被為遊御厭候間　此間違急度御返金被仰付候儀に付　御国恩の冥賀為弁　此度の御用向一同熟心の上相勤候様　万一不勤弁の者於有之ハ急度御沙汰可有之候

三月

御用金割合書の覚

三千両	前田藤次郎	三千両	片谷清次郎
弐千両	中村久蔵	弐千両	玉田善兵衛
千七百両	鳴海栄作	千七百両	松山長左衛門
千五百両	三上重郎兵衛	千五百両	月永長兵衛
千両	武田甚左衛門	千両	今村九左衛門
千両	戸沼治左衛門	八百両	七戸藤助
八百両	竹屋七郎兵衛	七百両	松木喜右衛門

冥加金差し出しの面々

六百両　稲見三左衛門　六百両　阿部弥八郎
五百両　斉藤佐左衛門　六百両　葛西幸七
五百両　加藤平太郎　三百両　金屋兵右衛門
三百両　西谷慶次郎
都合　弐万五千両

一、御目録　同巳年三月十八日
於御勝手方御申渡左に
此度調達金千両申付候処　早速御受申上奇特の至に付　御目録の通被下置候

一、御家中四合扶持　同巳年八月廿日
一、凶作に付町内小者・出入の者共に補助　同巳年九月八日九日

宝誉妙樹栄林大姉為菩提之
五丁目家数弐百九軒　此人別百拾六人
壱丁目家数弐拾壱軒　此人別百人

困究者に補助

新寺町家数五拾壱軒　此人別弐百弐拾三人
報恩寺門前拾五軒　此人別八拾六人
家数〆百拾六軒　人別〆五百弐拾五人

諸色入用費差し出しの面々

作事方一式　千五百両　七戸藤助
阿部弥八郎
武田正三郎
伊香八太郎
泉屋兵右衛門

三厩御国御入用　六百両　窪田伊左衛門
三国屋久兵衛
長谷川仁太郎

紙御蔵御買上代　三百五拾両　岩見忠兵衛
木下儀八

諸役人往来人馬賃銭宿継被下方

弐百両　三国屋源蔵

炭流木方　四百両　香具屋吉左衛門

境屋太右衛門

諸廉入用水油代　百弐拾両　松屋忠左衛門

御家中御貸渡味噌八百両　原市郎兵衛

松木八左衛門

塩屋利左衛門

稲見伊左衛門

佐山弥太郎

御献上並御召馬飼料方御広敷御台處

五百両　今村九左衛門

御馬屋一式　八百両　三上宇作

高岡並寺社御祈祷御備物御作事一式

（金額なし）　竹内久左衛門
　　高嶋屋半左衛門

御吉例金御用所差上金
八百両　月永長兵衛

御献上御入用　弐百両　西谷慶次郎

御武具蔵御入用　百両　坂本久左衛門

江戸大坂御飛脚路用
弐千両　戸沢治左衛門
　　竹浪七郎兵衛
　　加藤平太郎
　　松木彦右衛門

葛西幸七

御奥於御側役中御出席の上誓紙被仰付候

一、御召御紋黒紬拝領御料理被下候

同巳年十一月

於表板の間笠原近江殿御申渡

其方儀此度奥向御用被仰付候処　御時節厚く蒙御勘弁致　早速御用相勤候段奉達尊聴被遊御満足候　依之御召御紋黒袖一反一包被下置御料理被下置候間　猶又一同難在仕合奉存　此末共精勤致候様被仰付候

笠原近江の申し渡し

一、廉分御用金弐万五千両位　同巳年十一月

御家中葉銭渡高十二月より来九月迄

五千両　前田常次郎

片谷清次郎

御発賀一式　弐千四百両　中村久蔵
玉田善兵衛

右壱軒に付塩五升・味噌三文目代　壱人に付米壱升宛　出入の者家数四拾壱軒人別百八拾七人

右壱軒ニ付塩五升より壱斗　味噌三匁代より拾文目代迄　米壱人に付弐升より壱軒に付弐斗迄

一、御用達御中小性格俵子百俵被下置
同巳年十一月廿八日
於御城被仰渡左に
其方儀俵子五拾俵増　百俵被下置御中小性格御繰合方御用達被仰付候

一、御側方御用達　同巳年十一月
於御城被仰渡左に
其方共儀御側方御用達被仰付候間　御奥不及案内ニ罷通御用相勤候様

仲間　今村九左衛門　松山長左衛門
鳴海栄作　斉藤幸四郎
武田甚左衛門　武田治三郎

右六人御用達被仰付候て

御賞御手当被下方

森山佐兵衛
能登屋勘右衛門
角田吉三郎

御鷹御能一式　六百両

斉藤幸四郎
金木屋治三郎

御小納戸一式　三千両

鳴海栄作
井筒屋宇兵衛

御坊主方学問所　諸役所浦々御両所

鶴飼料　弐百両

松山久左衛門
伊勢屋亀次郎

諸賄料　百五拾両

金木屋源三郎
宮川久左衛門

御奥不時御用　三百両

武田甚左衛門

都合四拾七人

外に

七拾両　梅屋八之丈　五拾両　岩見弥兵衛
八拾両　米屋新八　五拾両　大坂屋三次郎
五拾両　竹内忠兵衛　百両　伊勢屋忠三郎
五拾両　山田久左衛門　百両　秋田屋佐七
百五拾両　松木屋三治郎　五拾両　室屋惣左衛門
百両　藤屋万右衛門　百五拾両　加賀屋儀三郎

五拾両　前田五蔵　五拾両　大津屋太蔵
百両　稲見長四郎　七拾両　相馬権太郎
百五拾両　太田文内　五拾両　境屋利助
百五拾両　古田喜左衛門　百両　大坂屋仁兵衛
百五拾両　工藤玄正　百五拾両　千年円四郎
五拾両　伊勢屋長兵衛　五拾両　中畑忠三郎
百両　小中三次郎　百両　増田屋幸助
百五拾両　一野屋宇三郎　百両　二津屋常蔵
五拾両　高山重助　五拾両　玉田嘉右衛門
五拾両　小山屋長八
都合　弐万五千両

一、上方登　同巳年十二月十二日出立

御尊慮御内意笠原近江殿より御内命には　開発方御収納米御差向　別段御才覚御用ニ付
此度御側役工藤与助及下役山崎才之亟方登ニ付其方附添登被仰付候　尤御買下米ニ付
此節森岡金吾・古川忠左衛門在坂中ニ付、ふ遠御用済迄其方共京都ニ逗留致、金吾御

藩用で大阪へ

用済之処ニ而大坂表江出張致候様、其節御才覚より坂向可被仰付旨御内命ニて十二月十二日、御国表出立工藤与助殿儀は諸事御用人同様ニて、山崎才之助同道同十六日出立、尤雪中之儀ニ付北国往来ふ相成奥州街道罷登

正月十日江戸着　召連家来何の上　支配人忠五郎並召使喜兵衛・伊之助　町飛脚藤次郎

右上下五人の処　伊之助道中にて病気に相成　秋田金山より下り　藤次郎儀江戸より下り　右代り新町寅吉と申者召連　上下四人にて上京いたす

一、御馬飼料壱疋四文目　同巳年十一月十六日

凶作にて諸色高直に付願の上　巳十一月十六日より午九月中　弐匁五分の処　壱匁五分増四文目直段ニ被仰付候願書御用留ニ在

一、御郡内大豊作　天保五甲午年

連年不作凶作中の豊作

去年凶作に付　夏中米価八拾目位の処　至極の順気にて暑気強　諸国豊熟に付　同年秋出来壱俵弐拾弐匁　大豆拾七匁也

一、九左衛門江戸着　天保五午年正月十日

旧冬十二月十二日御国出立の処　道中厚雪にて　廿九日振にて　正月十日江戸着に相成
三つ目御中屋鋪勘定奉行工藤惣左衛門殿御長屋二階え同居被仰　四月七日迄逗留　種々御用被仰付
扨京都御留主居村上長左衛門殿御呼下　勘定奉行戸沢新左衛門殿　右御両人開発方御用懸登坂被仰付候　村上儀は京都より大坂え引越　同処御留主居勘定奉行兼被仰付　江戸表逗留中申渡方　勘定小頭格並合金壱歩壱朱余　家来壱人に付弐朱御扶持上下一日五合つつ被下置候

上京途中、上方見物

一、京都着　　同午年四月廿四日着
四月八日江戸出立の節　道中鎗御免被仰付　尚又大坂詰合中　拝領御召御紋黒羽二重並帷子え写着被仰付　上下四人東海道相廻り　鎌倉八幡宮・江ノ嶋弁天参詣　夫より伊勢え参宮　道中十九日振　四月廿四日京都釜ノ座御屋鋪え伺候処　則日三條大橋旅籠屋目貫屋藤左衛門方へ着　五月二日迄罷在　翌三日より鮒薬師留小路西へ入鯨屋吉兵衛旅籠屋へ上下四人引移　九月廿四日迄同処に逼留　工藤与助殿儀は釜之座屋敷に罷在候に付度々窺に参　尤在京中　江州梅ノ木村今井主水え要談向に付　大津同人出張処へ度々罷越　猶又大坂御屋鋪え度々罷下り　御用柄相伺候処　九月廿四日京都引拂　九左衛門計

大坂出張被仰付上下四人にて下坂

一、大坂引移　　同午年九月廿四日

九月廿四日大坂難波橋南詰旅籠屋俵屋儀助へ落付　同所に九十日程逗留　日々御座鋪へ出勤御用相勤候得共　兼々江戸表にて村上長左衛門殿へ被仰付候には　九左衛門大坂出張の処にて　御館入出入第一に相成不見苦旅館へ差置候様被仰付候由にて　大坂一式の見晴宜敷　其上御屋鋪及御館入往来勝手能き処に付　東横堀新築地綿屋七兵衛貸座鋪丸家にて壱軒かり　西は難波橋　東は天満橋　西北に開き有　大坂第一の絶景にて　朝夕行　中にも薩州候の御座船善美を尽し　御船飾の美々敷事言語にも述難く　御供舟百余艘船毎に小旗え番付記し　其外天保山桜の盛行遊山船四季の絶間なく　夏は納涼船遊び　京四條の涼にもおとらず　浪花豪富の面々よもすがら芸子舞子引連れて　太鼓三味線うたけんの声不止　華火蕎麦酒肴いづれも船にて持ち運び　其外通船にて三四人乗の小船数十艘　東西南北へ乗廻り用弁いたし　誠に自由自在種々の佳興　旅宿座敷より居ながらながめ　如是絶景の場所故　御館入懇意の面々　茨木屋力太郎・鴻池新十郎・同庄兵衛・播摩屋仁兵衛初として　加島屋要助・山崎屋与七郎・茨木屋和助及各支配人迄度々旅宿にて出会　其外御登坂の御用人衆三沢新左衛門殿・常府奉行衆御館入召連度々

勝景の地に安住

出会いたす

一、二男万次郎御目見　同午年十月八日

大津屋万次郎儀　此節柄御勝手方御用格別出情相勤候に付　格段の以御沙汰年頭御目見被仰候

一、二男万次郎御上下拝領　同午年十月五日

於町奉行處に

大津屋万次郎儀御発駕御用向格別差働候旨相達　奇特に被思召候　依之御使御紋御上下被下置候

一、御馬飼料壱疋三匁五分　同午年十月より

去る巳年凶作跡に付　格段御沙汰を以　十月より来四月中　壱匁増三匁五分直段に被仰付候

一、御郡内中作　天保六巳未年

同年春立不気候に候得共　昨年豊作に付旧穀有之故　夏中迄米価弐拾四匁位　秋出来弐

拾五匁　大豆拾八匁　鰺ヶ沢御印付三拾八匁　青森四拾匁の御拂に成る　作休四歩に納る

一、九左衛門大坂表より江戸立帰下被仰付

天保六己未年十月七日

其方儀御用に付江戸表立帰下り被仰付候　依之路用為御手当金五拾両被下置之

十月六日

江戸表え

右御用柄御才覚下拵に成就相成候得共　江戸表より御重役衆御登坂被差控候様被仰付候得共　年末に相成候ては御頼談に相成兼　猶又機密を抜候ては　御取障に相成候に付右伺旁難尽筆論候に付　九左衛門出府の上　江戸表重役衆之　大坂の模様精相伺いづれ共御評決承　片時も早期坂致候様　京都御詰合工藤与助殿及大坂常府村上長左衛門殿・萩原源司殿より被仰付　十月七日大坂出立　同十七日江戸表着　則晩江戸御詰合御重役中え委細申上候處　右の趣御尊慮奉伺候て御評決に相成　来る十二日御家老衆御登坂被仰付候間　其方儀明日帰坂致候様被仰付

十一月九日江戸表出立　同廿一日大坂表之罷下り奉行中之被　〇上　御家老衆御登坂専御待受の処　数日に相成又々御日延の儀被仰付候

御馬廻格を仰せ付けられる

一、於江戸表御馬廻格御取立

同未年十一月二日

江戸御屋形御料理於上ノ間御用人衆不残御用番勘定奉行出席御家老衆御申渡

其方儀大坂表御用格別心を入実体出情相勤候に付格段の御沙汰を以　御馬廻格被仰付

諸事是迄の通相勤候様被仰付之

一、御買越米に付三貫六百目御用立　同未年

一、御馬飼料壱疋三匁直段　同未年

当年も欠作にて申立の処　壱疋に付五分増五月より十二月中三匁直段被仰付候

一、御郡内凶作　天保七丙申年

同年春立より夏中迄米価弐拾五匁の処　六月後暑氣甚薄く不気候故不熟に相成　八月に入段々引立　秋出来六拾匁　大豆四拾弐匁位　十二月に入追々引立八拾匁迄

一、御用金八拾両　天保七丙申年五月

右は十ケ月割御町方より調達被仰付候得共　四拾弐両上納残一統御免に成候

一、御馬飼料壱疋四文目直段　同申年十月

当年正月より九月中弐匁五分の処　凶作にて追々諸色高直に相成に付　右申立候処　十月朔日より来酉九月中　壱疋壱匁五分増四文目直段に被仰付候

一、御郡内半作　正保八丁酉年

前年凶作に付　夏より米価八拾五・六匁の所　当年も季候よろしからず故追々引立　六月に入壱俵百八拾匁迄　秋苅立後新穀四拾五匁より引下げ三拾弐文目迄　夏中前書の通近来の米高なり

大塩平八郎の乱

一、大塩平八郎放火に付大坂旅宿類焼　天保八丁酉年二月十九日

在坂中四ヶ年の間　東横堀築地の内丸屋にて借宅日々御屋鋪之出勤　然る処二月十九日朝五つ時　大坂与力大塩平八郎徒党の者百三拾人　追々集勢弐百五十人　大筒五挺・小筒弐拾挺　火矢其外鎗刀抜身　平八郎親子申霄にて旗押立　最初自分尾宅より与力町同心町　夫より天満天神宮東照宮初め　天満橋通大筒を以焼拂　難波橋押渡　船場え越え今橋通鴻池善右衛門同庄兵衛より打初　近所別家及同町裏表平野屋五兵衛　三つ井岩城

の呉服店　米屋平右衛門炭屋善五郎同彦五郎始として　豪商の面々残り少くなに焼拂
凡家數壱万八千弐百五拾軒　十九日朝より廿一日夜迄昼夜の放火に付　大坂御城大手先
之近国の諸候　尼ケ崎松平遠江守様初め六ケ国の御人数御固被仰付　いづれも騎馬半具
足其外大坂御大名屋敷より御人数差出し　誠に古今未曽有の騒動　旅宿は平野屋五兵衛
近所にて　十九日昼御屋敷之出勤跡衣類家財迄不残焼失に付　佃屋勘左衛門方之引取出
立迄同居罷有候　大塩騒動始末別巻にあり

衣類家財迄残らず焼失

一、九左衛門国表え免下り　同酉年三月廿九日

森岡山城殿被仰渡

其方儀事急速の御用有之候間　道中差急罷下候様尤其方懸合の御用済迄　支配人忠兵
衛儀当分御差留被仰付候

お国表帰りの際に見送りの方々

右の通被仰付候付　佃屋勘左衛門宅御出立　則日勘左衛門初御館入の面々　伏見迄見送
致呉候　尤忠兵衛儀ハ　戸沢新左衛門殿御長屋之引取御用相勤候処　同年十二月御用付
御館入　升屋平左衛門支配人方助　近江屋分兵衛　右両人同道下り被仰付江戸表之同廿
八日着　逗留中御館入並合上下弐人金四両ツヽ御賄被下置候て　翌戌五月御用済　同月
十日出立　廿六日御国着

一、町内小売米三百俵　　同酉年二月より八月迄
当年米価高直に付端々小売米無之に付　重立之割合の上　小売米差出　壱俵に付三拾匁
直段に差出

一、御用金百七拾両　　同酉年五月
屋形様御下向金御用に付調達被仰付候

一、御用米三拾俵　　同酉年八月
高弐百俵被仰付候内上納残御免被仰付候

一、御用金五拾四両　　同酉年九月
高弐百七拾両被仰付候内　月割上納残御免被仰付候

一、御祝頂戴御能見物　　同酉年五月十日
此度就御昇進御祝言方儀　右御祝頂戴御能見物被仰付候　猶日限出刻等の儀は町奉行処
より可申通候以上

銀札通用の存念書

五月十日　　御側方

今村九左衛門殿

一、御元〆新席被差立　同酉年七月

右御趣意田中勝衛と申隠居　御上様御在府中　江戸表え銀札通用の存念書差上の所　早春江戸表え御呼登せ　度々御逢の上勝衛趣意御聞届被仰付　悉皆同人え御委　同年夏御国表え罷下候　三の御丸御屋形え御元方新席被差立　御元〆奉行被仰付　同役本田東作・佐藤拾蔵・杉沢金五郎其外　御役方不残新タニ相成　是迄の勘定奉行及御勝手方名のみ　廃席同様に相成　威権委々御元方ニ有大略左に

一、宮崎八十吉名前銀札を通用　手形差立て　札壱枚高弐拾八匁より以下五分迄正銭同様通用被仰付候事

一、御家中御買上米代及凡て諸渡共札にて御下銭の事

一、米穀定価にて御買〆所　在浦々及弘前え数十ヶ所差立　御役方居り　石御買〆所の外　米穀売買厳敷差留の事

一、在町飯料町役より人別通帳相渡り　壱人に付一日玄米五合宛御買〆所より札にて御拂被仰付候事

一、家業柄に寄り　米穀入用の者は願書差出　御買〆所より御拂被仰付候事

一、在町身上厚薄に不拘　旧家御詮儀の上　俵子五拾俵可被下置御用達四拾人被仰付候事

一、船手及都て他邦より入品の儀　弘前及在浦々え御買〆問屋被差立　右の外売買厳敷御差留被仰候事

一、御郡内是迄諸取引の儀　壱貫目以下拾ヶ年　壱貫目以上五拾ヶ年に被仰付候事

右大略

一、御元方御用達被仰付　同酉年八月廿九日

其方儀先祖旧功被思召御元方御用達被仰付之

是迄御勝手方御用達に御座候得共　此節御勝手方にて米金銭御扱無御座　御元〆席御取扱ニ付　是迄御用達御用無之に付　新タニ佐山弥太郎と此方両人　御元方御用達被仰付

隔月に通用番可勤候

一、御郡内凶作　天保九戊戌年

凶作につき米価高騰

同年四月迄通用手形融通の処　米価正金銭にて五拾六匁位　通用手形にて壱俵百弐拾匁より百五六拾匁迄　三・四月に至五百目余　四月末通用手形差止に相成　正金銭融通の

処六拾目位に相成候　尤同年春立より気候不宜　別て土用中薄暑雨天続にて不熟、新百目より百四五匁迄　大豆五拾目より六拾匁

一、御元〆席並通用手形御止め被仰付

天保九戌年四月

昨年御元〆席被差立　通用手形融通被仰付候得共　兎角御郡内不融通にて人気動揺致惣引擔田中勝衛身上被召上　川原平村え蟄居被仰付　三の丸御元方席御潰　右の趣意不残御止　以前の通勘定処之引移相成

一、御巡見使御下向　同九戌年五月

御巡見使御三人御下向の内　一の御宿二男万次郎え手伝頭取扱被仰付　一の御巡見使黒田五左衛門様　御用人弐人え給人目附弐人　御勝手元〆壱人　右上下弐拾三人　御宿石川村・浪岡村・蟹田・今別　御帰には浅虫御昼宿にて　万次郎え黒田様御逢の上御懇の御挨拶被下置候処　御達にて左に

於松井四郎兵衛宅町奉行北原惣蔵御申渡

大津屋万次郎儀　当御巡見使御下向の節　御宿手伝頭の処　格別骨折出情相勤奇特の者に付　格段以御沙汰弐人扶持被下置候上　御用達次順被仰付候

巡見使三人下向ニ二男万次郎手伝い

十月十五日

一、御用金三拾五両　同九戌年六月

右者御発駕金在町浦々え三千金御割付被仰付候尤被仰付高三千金不残皆納に相成候

一、支配人忠兵衛え御手当　同九戌年六月晦日

其方支配人忠兵衛儀永々逗留中物入増に相成候趣　殊御用向精勤に付　為御手当金拾両被下置候　此旨可申付候已上

六月三十日　御元〆

今村九左衛門殿

一、御扶持方被下置　天保九戌年七月七日

其方儀開発方御用達数年来米銭受拂　格別心を入出情相勤候間　右御用達勤中三人扶持開発御用米の内より被下置候

一、御酒・御吸物被下置　同戌年八月廿七日

其方儀別段調達金被仰付候処　厚差含日限前皆納相立候処　外々者も出情上納相立寄特の至候　猶又其方儀は上納銭受取方取扱骨折出情に付　為御賞於町奉行願出の通被下置候

但御酒・御吸物・御引肴二種・御千菓子

一、御馬飼料壱疋五匁五分被仰付

同九戌年十月

乍恐口上書奉申上候　御馬飼料代の儀　近来諸色高直に付難渋仕候間　昨年御直段増の儀奉願候処　一日壱疋壱匁五分増四匁直段に被仰付是迄の処御用支に不相成候様差略の上上納仕罷在候　随て当十月に入諸色以前の通にも可相成哉と奉存候処　当年も不計不作にて　昨年より倍双の直段に相成候得共　出盛相場居り不申候得バ高下奉申上兼罷在候　然ル所此節に至候ても諸色下落不仕　弥々高直に相成　去秋御直段増被仰付候節より　此節倍双の直段に相成　第一御入用品左に

一、大豆壱俵例年拾四・五匁　去秋弐拾八匁位の処　当時五拾五・六匁に御座候

一、粉糠壱俵例年五匁位の所　昨年冬七匁位　当時拾壱匁に御座候

一、酒粕壱俵例年五匁位の処　昨年冬八匁位　当時廿四・五匁より三拾匁位にても拂底

一日壱疋壱匁五分の直（ね）上げ

凶作続きにつき飼料代高直

諸色は三倍程の直段

に御座候

一、飼料方手代並日雇人夫飯料壱俵例年弐拾四・五文目　去秋四拾八匁より三拾弐匁位の処　当時九拾五・六文目にて御座候

右の通去秋より此節に相成　倍増の直段にて　其外右に順じ飼料諸色共高直に御座候何卒当十月より已来　明年諸色下落仕候迄　御馬壱疋飼料代一日五匁五分直段に被仰付被下置度奉願候　御時合柄永家業にも御座候間　通例の事に御座候得ば　御取扱向不奉願候得共　何れも諸色三双倍程の直段に相成　其上当年御馬数も多御座候処より　飼葉藁等に至迄　春立より上納御差支に及候所より　自然直段上の上買備仕候儀に御座候間不得止事此段奉願候　幾重にも以御憐愍宜御沙汰被成置度乍恐此段奉願候以上

戌十二月　　大津屋九左衛門

御公務方様

御側方えの前書文言の外左に

御召御馬屋の儀は草飼料と違　刈豆枝菜上納の儀　且粉糠も相増　都て諸色別段吟味の上上納仕候儀御座候間、明年諸色下落迄三御馬屋五分増　御馬壱疋に付六匁直段に被仰付被下置度奉願候

右の通書加え御側方え差出申候　尤勘定処十二月廿一日　壱疋五匁直段に被仰付候得共引合不申趣再願の処御済口左に

三御馬屋飼料代　当年格別諸色高直の旨申出に付　壱疋五匁直段に被仰付候所　右にても難渋の趣再応申出　当年柄不得止事誠に此上諸色直段引上候ても　決て御取扱の儀不申出旨共無余儀相聞済候間　格段の以御沙汰申出の通　来九月中迄五匁五分直段被仰付候間　御時合勘弁の上取扱候様被仰付此旨申入候以上

飼料代更に直高になり五匁五分

十二月　　勘定小頭

大津屋九左衛門殿

御召御飼料代当年格別諸色高直に付直段増被仰付度儀委細申出候趣　不得止事相聞済候間　来九月中には飼料代五匁五分直段被仰付候間　御時合勘弁の上取扱候様此旨申入候以上

十二月　　御側方

大津屋九左衛門殿

一、御用代渡方願書　　同九戌年八月

乍恐以口上書奉申上候　御馬飼料品上納御差支に付　以御威光取繕候様被仰付度旨　先頃より以書付度々奉申上候処　此節御差逼の御場合に付　御入金の処にて御渡方可被仰付候間　此上御時合深差含差略の上御用欠に不相成候様被仰付奉畏候得共　兼て度々奉願候通　近来諸色高直の上不融通の場合に御座候得共　御場合深勘弁仕　御用代弐千両近く御滞に相成候得共　聊御取扱筋の儀不奉申上　味噌醤油家業迄相止　右元入銭打込其外船手より才覚等仕　是迄の所漸々御間を合来候得共　此節に至諸色弥々拂底に相成別て大豆・粉糠・藁の類去月より上納仕舞に相成　買入の手順無御座候　去月十日より是迄の処　日々心配仕候て御間を合来候得共　迚も来る廿五日より如何体被仰付候ても是迄相尽候跡の儀に付　此上差略相成兼難渋至極仕候　外儀と違ひ一日も上納遅滞難相成儀に御座候間　差当り御用欠に相成御呵も奉恐入候間　前方此段奉申上候　何卒御用支に不相成候様　今明日中早速御沙汰被成下置度　是迄の処精々相尽候儀に付　不得止事不奉願恐も又々此段奉願上幾重にも以御憐愍　宜御沙汰被成下置度奉願候以上

戊八月

家業の味噌醤油づくり止める

一、御馬方御用代え御米弐千九百俵
壱俵七拾目立弐百三貫目渡方

御馬方御用代過分に滞納

同九戌年九月

御馬方御用代渡過分御滞ニ付　飼料品買入方行届兼候趣　不得止事相聞済候間　当新穀にて御米千俵渡方可被仰付旨被仰付候処　是迄の処段々差略も相尽置の儀御座候得ば前書千俵にて迚も行届兼候旨　今千俵相増都合弐千俵御渡被仰付度旨　又々申出の趣難黙止相聞得候間　不御容易御米賦には有之候得共　申出の通都合弐千俵新穀にて御渡方可被仰付候　然ル上は明年九月中迄の処　御馬方の儀共決て御取扱向不申出候様被仰付下候此旨申入候以上

九　月　　御元方

御召御馬飼料代段々御滞相成候得共　是迄取繕無差支相勤候に付　此節の御場合には候得共　格段の御沙汰を以　御米九百俵当新穀を以渡方被仰付候間　猶此上厚差含急度差支無之様　来秋迄の処春買備上納致候様此旨申入候以上

九月八日　　御側方

お国表へ到着

一、大坂御館入御国下　　同九戌年十月

御尊慮にて大坂御館入並常府勘定奉行御呼下　右取扱方御用掛に被仰付候　尤御館入稲

川万太郎支配人の内　茨木屋大次郎・山崎与七郎手代市郎兵衛・大次郎手代兵蔵共上下六人　奉行萩原源司殿同道　十月廿九日御国着に付　石川村昼処迄出迎　則日此方え着

御元〆小頭不残罷出待受　尤御館入は上下共此方別店へ止宿被仰付　萩原源司殿・金屋金蔵・兵右衛門懸屋鋪え止宿被仰付　逗留中日々御役人様御宅にて御用談の度に出席被仰付　御城において御料理頂戴　或は御寺拝礼等迄同断　御用人津軽金蔵様及其外御同僚様方度々此方え御出　逗留中悉皆御用懸り被仰付　翌二月十二日御用済にて出立　石川駅迄御元方小頭並九左衛門見立　忠兵衛碇ヶ関迄見立首尾能出立相済候

天保十己亥年ヨリ追加出ス

以上

青森県立図書館解題書目刊行一覧

第1集	津軽史	昭和46年10月21日	発行
第2集	官省指令留・官省願伺届	昭和47年3月10日	発行
第3集	滝屋文書	昭和48年3月10日	発行
第4集	木村文書	昭和48年11月25日	発行
第5集	多門院文書	昭和50年2月1日	発行
第6集	五家文書	昭和51年3月31日	発行
第7集	萬日記抄一	昭和52年3月25日	発行
第8集	萬日記抄二	昭和52年7月28日	発行
第9集	萬日記抄三	昭和53年3月25日	発行
第10集	津軽史解説目次抄一	昭和54年6月25日	発行
第11集	津軽史解説目次抄二	昭和56年3月5日	発行
第12集	津軽史解説目次抄三	昭和57年3月15日	発行
第13集	津軽史解説目次抄四	昭和58年3月15日	発行
第14集	津軽史解説目次抄五	昭和59年3月25日	発行
第15集	萬日記抄四	昭和60年6月24日	発行
第16集	萬日記抄五	昭和61年6月26日	発行
第17集	萬日記抄六	昭和62年6月20日	発行
第18集	大津屋文書一	平成元年1月31日	発行

A 025		
A		解題書目　第18集　　青森県立図書館編 青森　平元 125p　21cm 内容：大津屋文書　一

平成元年1月26日印刷
平成元年1月31日発行

編集
発行　青森県立図書館
青森市新町二丁目4番30号
電話　0177（22）－1111
内線　5484～5489

印刷　東奥印刷株式会社
青森市古川二丁目17番5号
電話　(76) 5361（代）

（中性紙使用）